

西隆寺跡発掘調査報告書

2001

奈良市教育委員会

『西隆寺跡発掘調査報告書』 正誤表

ページ	舊 所	類	正
目 次		1 瓦 砖	1 瓦 砖
目 次	fig.10	S E 750	S X 750
1	1行目	序 言	I 序 言
3	5行目	深さは換出	深さは
7	30行目	↑ 穴	↑ 納穴
9	24行目	右京二坊坊間西小路	西二坊坊間西小路
11	11行目	屋	廊
11	28行目	廟	廟
27	fig. 22	1:2	1:1
29	fig. 23	(図中に追加)	「十五」坪
31	17行目	圓廊内	圓廊
34	22行目	復元圖	復原圖
35	4行目	復元条坊	復原条坊
35	6行目	復元条坊	復原条坊
35	14行目	復元条坊	復原条坊
35	18~19行目	獨立柱建物	獨立柱建物
35	30行目	獨立柱建物	獨立柱建物
図 版	PL. 6	6225 C	6225 A
図 版	PL. 6	6012 C	6012 A b



金堂・中門北調査区全景(北東から撮影)

序 文

奈良は、都である平城京がおかれて以来、今日に至るまで1290年もの間、日本の心の故郷として歴史と文化を育んできたまちであります。長年にわたって守り継がれてきた自然と文化遺産は、平成10年に「古都奈良の文化財」として世界遺産に登録されました。新世紀を迎える奈良は歴史と文化の中心地としての役割を担い、国際文化観光都市としてさらなる飛躍をしていこうとしております。

さて、奈良市では、住みよい活力あるまちづくりを目指して、都市計画道路の整備事業を進めており、このうち西大寺一条線の建設は、近鉄西大寺駅へのアクセスを便利にし、この地域の発展を図る主要事業であります。この事業区にかかる西隆寺跡は「古都奈良の文化財」の平城宮地区に隣接した重要な遺跡であり、事業計画の当初から、道路面を高くするなど遺跡の保護に努めてまいりました。

道路建設に先立つ発掘調査につきましては平成2年度から継続しておりますが、今回の現地調査にあたりましては奈良国立文化財研究所のご指導のもとに行い、この報告書の作成につきましても同研究所にお願いし、ご協力を賜りました。

ここに、ご指導、ご協力いただきました関係の皆様に対しまして、あらためて厚く御礼申しあげます。

平成13年3月

奈良市教育委員会

教育長 冷水 毅

目 次

I	序 言	1
II	遺 構	
1	北面回廊・金堂調査区	2
2	金堂・中門北調査区	5
3	中門・南門調査区	9
III	遺 物	
1	瓦 磚	12
2	土器・土製品	18
3	木製品・金属製品その他	22
IV	考 察	
1	条 坊	28
2	西隆寺伽藍	30
3	史料からみた西隆寺の成立と変遷	33
V	結 語	34
	報告書抄録	36

挿 図

fig. 1 西隆寺周辺の平城京条坊	fig. 9 SE740 平面図・断面図
fig. 2 調査区位置図	fig. 10 SE750 平面図・断面図
fig. 3 第299次調査区位置図	fig. 11 SX760
fig. 4 北面回廊・金堂調査区(第299次)遺構平面図	fig. 12 中門・南門調査区(第309次)遺構平面図
fig. 5 SB680の柱根残る柱穴	fig. 13 赤丸瓦拓本・実測図
fig. 6 SD690 断面図	fig. 14 軒平瓦拓本・実測図
fig. 7 SD095・SD110・SF105・SX760 断面図	fig. 15 赤平瓦・丸瓦・半瓦・刻印瓦拓本・実測図
fig. 8 金堂・中門北調査区(第306次)遺構平面図	fig. 16 SD110 出土七器実測図

- fig. 17 SD690・SD095 他出土土器実測図
 fig. 18 鍛造・鍛冶関係遺物分布図
 fig. 19 木製品・金属製品実測図
 fig. 20 石器・石製品実測図
 fig. 21 石製品実測図
 fig. 22 石製品、鍛造・鍛冶関係遺物実測図
 fig. 23 条坊復原図
 fig. 24 灯籠・金堂位置関係模式図
 fig. 25 西隆寺伽藍図

表

- tab. 1 杆瓦一覽
 tab. 2 SD110出土須恵器杯Bの法量分布図
 tab. 3 上師器と須恵器の器種構成
 tab. 4 古代寺院における灯籠遺構例

図 版

卷首 金堂・中門北調査区全景(北東から撮影)

PL. 1	北面回廊・金堂調査区(第299次)全景	PL. 4	中門・南門調査区(第309次)東口
	SC450・SB680・SD690		SX836
	SD095		第309次西口全景
PL. 2	金堂・中門北調査区(第306次)	PL. 5	西大寺伽藍絵図(西隆寺部分拡大)
	SX750	PL. 6	軒丸瓦・軒平瓦
PL. 3	金堂・中門北調査区(第306次)	PL. 7	丸瓦・平瓦・朱付き軒平瓦・刻印瓦
	SE740	PL. 8	土器・土製品
		PL. 9	木製品・金属製品・錢貨・石器・石製品
		PL. 10	石製品、鍛造・鍛冶関係遺物

卷末折込

平城京石京一条二坊遺構図集成



fig.1 西隆寺周辺の平城京条坊



fig.2 調査区位置図 1:4000

例 言

1. 本書は、奈良市が同市西大寺東町に計画した都市計画道路建設予定地の発掘調査報告である。
 2. 調査は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部の調査指導を受け、平成10(1998)年度に北面回廊・金堂調査区(第299次)、平成11(1999)年度に金堂・中門北調査区(第306次)、中門・南門調査区(第309次)の調査を実施した。調査総面積は1,376m²である。なお、次数は奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当した平城宮・京の調査に付している一連番号である。
 3. 各遺構には、調査基準に従い一連の番号を付した。遺構の表記には、SB(建物)、SC(回廊)、SD(講)、SE(井戸)、SF(道路)、SX(その他)などの略号を用いた。
 4. 本書の遺構図に付した座標値は国土方眼第M座標系により、高さは海拔高で示す。
 5. 第299次、第306次、第309次調査の概要は以下に報告した。
『奈良国立文化財研究所年報1999-Ⅲ』奈文研、1999年9月
『第306次・第309次:『奈良国立文化財研究所年報2000-Ⅲ』奈文研、2000年9月
 6. 本書での調査報告書等の引用にあたっては、次のように略記する。
『西隆寺発掘調査報告書』西隆寺調査委員会、1976年3月 → 「報告1976」
『西隆寺発掘調査報告書』奈文研 1993年3月 → 「報告書1993」
『1993年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈文研、1994年3月 → 「概報1993」
『奈良国立文化財研究所年報1999-Ⅲ』奈文研、1999年9月 → 「年報1999-Ⅲ」
『奈良国立文化財研究所年報2000-Ⅲ』奈文研、2000年9月 → 「年報2000-Ⅲ」
『平城宮発掘調査報告』奈文研 → 「平城報告」
 7. 遺構、遺物の写真は奈文研平城宮跡発掘調査部の仙 幹雄、牛嶋 茂、中村一郎、杉本和樹が撮影した。遺構、遺物の整理は同調査部の各調査室が分担してあたり、柱根・木製品の樹種鑑定、年輪年代測定は奈文研埋蔵文化財センター光谷拓実、金属製品・石製品の材質分析は同肥塚隆保、高妻洋成が行った。本書の執筆分担は次の通り。
 - 1 千田剛道・蓮沼麻衣子・松浦五輪美・宮崎正裕 Ⅱ 1・3 千田剛道 2 蓮沼麻衣子 Ⅲ 1 千田剛道
 - 2 高橋克壽・神野 恵 3 次山 浩 Ⅳ 1 中島義晴 2 蓮沼麻衣子 3 御野和己 Ⅴ 千田剛道
 8. 本書の編集は奈文研平城宮跡発掘調査部長田辺征夫の指揮のもとに千田剛道が担当した。」

序　　言

近鉄西大寺駅の北東一帯は、奈良時代後半には西隆寺が建立された場所である。絵図などによると、西隆寺の遺跡は鎌倉時代には水田と化したが、昭和40年代半ばからこの周辺でショッピングセンター建設などの開発が相次ぎ、事前の発掘調査が幾度か重ねられてきた。

まず、昭和46(1971)～47(1972)年度の発掘調査によって、金堂、塔、東門、築地跡など、西隆寺伽藍の中枢部が確認された(『報告1976』)。このあと、この地に奈良市による西大寺一条線街路整備事業が計画された。これは近鉄西大寺駅から北東に向かう延長392m、幅員20～28mの道路事業で、先に明らかにされた西隆寺の主要伽藍を南北に継続するものであった。これまでの調査成果をもとに、金堂をはじめ主要伽藍への影響を考えて路面を上げ、遺構の保護をはかることで、昭和57(1982)年度に事業認可を受けた。この事業の事前発掘調査のうち、平成2(1990)年度の第221次調査、平成3(1991)年度の第223～4次、第223～21次、第227次、第228次調査は、すでに報告書が刊行されている(『報告書1993』)。また、事業隣接地では不動産会社社屋建設に関連して、平成5(1993)年度の242～12次調査が実施されている(『概報1993』)。

今回、報告の調査区(次数)、面積、期間、調査指導および現地調査担当(*)は以下の通りである。
北面回廊・金堂調査区(第299次) 320m² 平成11(1999)年1月18日～3月5日

高瀬要一、千田剛道*、玉田芳英、加藤真二、箱崎和久、山下信一郎(奈良国立文化財研究所)
松浦五輪美*(奈良市教育委員会)

金堂・中門北調査区(第306次) 650m² 平成11(1999)年7月1日～9月30日

山崎信二、内田和伸、次山淳、蓮沼麻衣子*、高橋克壽、吉川聰(奈良国立文化財研究所)
宮崎正裕*(奈良市教育委員会)

中門・南門調査区(第309次) 406m² 平成11(1999)年10月20日～12月28日

高瀬要一、千田剛道*、玉田芳英、箱崎和久、山下信一郎、清水重敦(奈良国立文化財研究所)
宮崎正裕*(奈良市教育委員会)

調査地は、旧秋篠川の氾濫で形成された砂質土層がベースをなしており、西隆寺、平城京条坊などの主要な遺構は、この土層あるいは、その上の整地土上で検出した。以下、年代順に概観する。平城京前の遺構には大型の掘立柱建物、溝、土坑などがある。建物、溝の主軸は大きく北で西に振れる特徴がある。詳細な時期の特定はできないが、周囲から弥生、古墳時代の土器が出土している。平城京(西隆寺造営以前)の遺構として右京～一条坊条間北小路と南北両側溝、坊間西小路と東西両側溝があり、前者は從来の想定位置よりかなり北に寄る事が判明した。区画内には土坑、井戸などがある。七器の他に銀製帶金具、銅鏡などの注目すべき遺物がある。西隆寺の遺構としては金堂、北面回廊に関する遺構を検出した。金堂の南面に広がる瓦敷とその南側で伽藍中軸線上に灯籠の据え付け穴を確認し、金堂前面の状況が明らかになった。北面回廊については礎石の据え付け穴を検出した。検出位置からみて北面回廊には講堂は取り付かない公算が強くなった。

西隆寺廃絶後の遺構には金堂、中門、南門推定地付近で瓦を大量に廃棄した上坑などがある。

II 遺構

今回の調査地一帯はもと水田で、調査前には土上に盛土があった。調査区の土層は水田耕土、床土の下に灰褐色土、暗褐色土などの遺物包含層ないし整地層とみられる土層が続き、砂質土または粘質土の地山に至る。中・近世の水田耕作に関係する細溝を除き、遺構の大部分は地山面で検出した。検出した遺構は年代順にみると、平城京以前、平城京（西隆寺造営以前）、西隆寺崩、西隆寺廃絶後の4時期に分かれる。

遺構の記述に際しては、各調査区ごとに土層の状況、遺構の解説の順でおこなう。

1. 北面回廊・金堂調査区（第299次）

北面回廊中央部付近から金堂北端にかけて調査した。調査面積は320m²で、南端70m²は西隆寺第3次調査区と重複させた（fig. 3・4）。

基本層序

調査区の基本層序は、上から盛土、水田耕土、床土、灰褐色砂質土（遺物包含層）と続き、現地表下約0.8m（標高71.7~71.8m前後）の黄褐色砂質土（整地土と推定）上面で西隆寺関係の遺構を検出した。その下の灰色または黄褐色砂質土上面で、西隆寺造営以前の平城京および平城京造営以前の遺構を検出した。この調査区での遺跡のベースは、基本的に砂質土あるいは砂層である。

検出遺構

平城京以前の遺構

調査区北端に検出された掘立柱建物、溝、土坑などがある。

SB 680 国土方眼北に対して西に約25度振れる大型掘立柱建物の南西部分。この建物の平面復原は確定しないが、西側に庇の付く平面と仮定して記述する。身舎の柱位置3箇所は布掘状の掘形（幅1m、長さ5.5m。北寄りで東に1mほど張り出す）内にある。庇掘形は4箇所あり、平面は1.0×1.5m前後で東西に長い。妻側掘形は2.1×1.2mと南北に長い。掘形の深さは身舎が0.2~0.4m、庇では0.2~0.5m、妻柱掘形が0.9mで最も深い。妻柱掘形には角柱の柱根（断面が23×51cmの長方形、残存長42cm、fig. 5）を残し、他は抜き取られている。柱間寸法は梁間が約2.3m、桁行と庇の出はいずれも約2.7m。柱根の樹種はヒノキで、最外年輪が西暦265年という測定値を得た。この資料は樹皮、邊材（シラタ）を残していない。

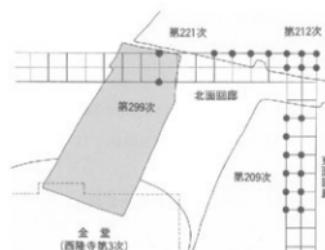


fig.3 第299次調査区位図 1:800

SD 681・SX 686他 SD 681はSB 680の西に約2.2m離れ、南に延びる細溝。幅は0.2~0.25m前後で深さ0.1m前後、溝内部は黄色粘土で共通し、SB 680と同時期と推定される。SX 686他は小穴群で、埋土は黄褐色粘土で、SB 680の足場穴が含まれよう。

SK 684 北西隅部で検出した一辺1.2mほどの土坑の一部。埋土は炭化物混じりの暗灰色砂質土で、6世紀後半の須恵器が出土した。

SK 685 SB 680庇南端の掘形に重複する土坑。一辺約3m、深さは0.7mまで確認。出土遺物は無い。



fig.4 北面回廊・金堂調査区(第299次)遺構平面図 1:200

平城京（西隆寺造営以前）の遺構

いずれも西隆寺造営時の整地層とみられる黄色砂質土の下から検出した。区画の北および西を限る溝、区画内の土坑などがある。

SD095 西二坊坊間西小路東側溝。調査区南西部の南北溝で、西隆寺第3次調査で検出したSD095の北延長部にある。溝の規模は幅1.9m、検出面からの深さは検出0.4mである。溝の勾配は南下があり。溝内の堆積層は下層が暗灰色砂質土または茶褐色砂質土、上層が灰褐色砂質土である。灰褐色砂質土上面には小穴3箇所(SX694～696)が掘られており、そのうちSX695からは銅鏡転用腰堵が出土した。灰褐色砂質土層からは銀製帶先金具が出土した。SD095からは土器、埴輪片などが出土した。出土土器は平城Ⅲまでのものが多い。

SD 690 一条条間北小路南側溝。調査区北寄りの東西溝で、幅1.96m、深さ0.5mである。溝内埋土は、大きく上層(灰褐色砂質土)、下層(灰色砂質土)に分かれる。溝の東半部には灰色砂質土の下に、暗灰色質土がある(fig.6)。溝底の一部に杭列跡とみられる小穴群がある。暗灰色砂質土上面は酸化鉄やマンガンが沈着し、暗赤褐色を帯びる。出土土器は上、下層とも、ほぼ8世紀前半におさまり、顯著な時期差は見出しがたい。

SD 691 一条条間北小路北側溝。調査区北西溝で検出した。後世の土坑と重複しており、わずかに南端(幅0.7m、深さ0.2m、暗赤褐色砂質土が堆積)を残すのみ。奈良時代前半の土器が少量出土した。

SF 692 一条条間北小路。SD 690とSD 691にはさまれた東西方向の空間。路面幅は約6.0m。

SK 693 土坑。東西約5.8m、南北約2.1m、深さ約0.25m、埋土は暗褐色砂質土である。土器は土師器甕・杯、須恵器杯・甕などの奈良時代前半中頃のものが少量出土した。区画内の北東溝の塵芥廐・薬用の土坑であろう。

西隆寺の遺構

SB 100 金堂。西隆寺第3次調査で検出した金堂の基壇北端部分にある。削平により金堂の基壇土は残存しておらず、掘込地業も見られない。本調査区では基壇外装の抜取溝を東西に約15m分を再検出した。そのうち西寄り約6mは階段部分で、北に約1.5m張り出す。

SC 450 北面回廊。後世の削平のため回廊基壇土、基壇外装、雨落溝などは失われているが、調査区北端で、礎石の掘付け掘形を南北2箇所に検出した。第212次調査で判明している回廊北東入隅から西へ数えて7番目の柱位置にあたる。掘形は、いざれも一辺約1.4mのはば方形で、底部をわずかに残す(深さ0.1~0.2m)。掘形埋土は暗褐色砂質土である。掘形中心間の間隔は4.8m、複廊の南および北側柱筋にあたる。基壇の掘込みは認められない。

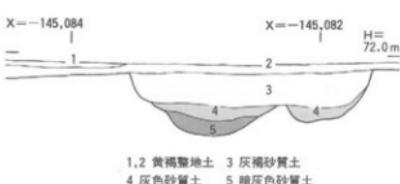


fig.6 SD 690断面図(Y=-19,518) 1:40

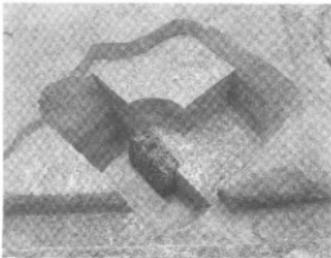


fig.5 SB 680の柱根残る柱穴(東から)

西隆寺廐絶後の遺構

SK 697他 土坑群。西隆寺廐絶後瓦片や、凝灰岩片を廐棄した土坑。金堂北側の11箇所(S K 697~702・704・705・726~728)には特に瓦が多く廐棄される。土坑の大きさは一辺0.5~1m、深さ0.4~0.6mほどのものが多い。土坑内の瓦は、細かく破碎されているのが特徴である。

2. 金堂・中門北調査区（第306次）

本調査は西隆寺寺域のうち、金堂基壇の一部および金堂と中門の中間地を発掘した。調査区は排水管が横切っているため南区、中区、北区と3つに分かれており、調査面積は全体で650m²、北区・中区で西隆寺第3次調査と約85m²重複する。

基本層序

現地表面から順に近現代の盛土、黒灰色粘土（旧耕土）、灰白色砂質土（床土）、黄灰・褐色砂質土（遺物包含層）となっており、その下の褐灰色砂質土（整地土）上面および灰青茶色細砂・灰褐色粗砂（地山）上面で平城京や西隆寺期の遺構を検出した。遺構面の標高は71.5～71.65mで、北東から南西にゆるやかに下る。

遺構は、おもに平城京以前の斜行溝10条、平城京期の西二坊坊間西小路と東西両側溝、東西溝5条、井戸1基、西隆寺期の灯籠据付穴と東西瓦敷、西隆寺廃絶後の瓦土坑などを検出した（fig. 8）。金堂基壇は削平されて全く残っていなかった。他に建物や構造物としてはまとまらない小穴・小土坑も多数検出した。

検出遺構

平城京以前の遺構

SD741～SD749・SD754 國方眼の約45度方向にはしる斜行溝群。中区・南区の地山（灰青茶色細砂・灰褐色粗砂）上面で、北東から南西および北西から南東へ下る溝をそれぞれ5条ずつ検出した。前者と後者はほぼ直交する。幅は0.25～0.35m、深さ0.05～0.15mで、SD741のみ幅が約1mとなる。また溝心距離は2.0～2.5mである。SF105上でも検出したが、SD095やSD110には切られることから、奈良時代以前の遺構と考えられる。埋土は黒茶色粘土で遺物は全く含まないため、水田耕作にともなう溝もしくは水田の区画を示す畦と推測する。ちなみにSD743、SD745などは、東方で以前検出された古墳時代の斜行大溝SD350とほぼ平行になる。SD350は水田にかかる灌漑用の水路とみられており、今回検出した斜行溝群もSD350と一緒にものと考えられる。

平城京（西隆寺造営以前）の遺構

SD095A・B 西二坊坊間西小路東側溝（fig. 7）。西隆寺第3次調査の重複部分を含み、南北約28m分を検出した。第3次調査同様、2時期に分かれたが、SD095A・Bとも素掘り溝で南に流れる。下層のSD095Aは幅が約1.6m、深さが0.1～0.2mで、埋土は茶色系粘土と灰白色砂質土がシルト状に混ざる。上層のSD095Bは幅約2.3m、深さ0.1～0.35m、埋土は黄灰～暗灰色の砂質土で平城Ⅲ～Ⅳの土器などを含み、広めに改作されていた。

SD110A・B 西二坊坊間西小路西側溝。SD110A・BもSD095同様、南に下る素掘り溝で、南北約27m分を検出した。下層のSD110Aは幅1.6～2.0m、深さ0.15～0.25m、埋土は暗青灰色粘質土と灰色砂がシルト状に混ざる。溝底上面で土器片が多く出土した。上層のSD110Bは幅3～4m、

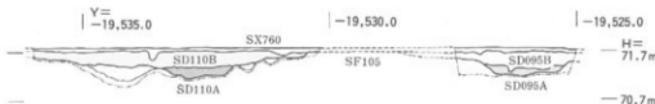


fig.7 SD095・SD110・SF105・SX760断面図(X=145,127.0) 1:100

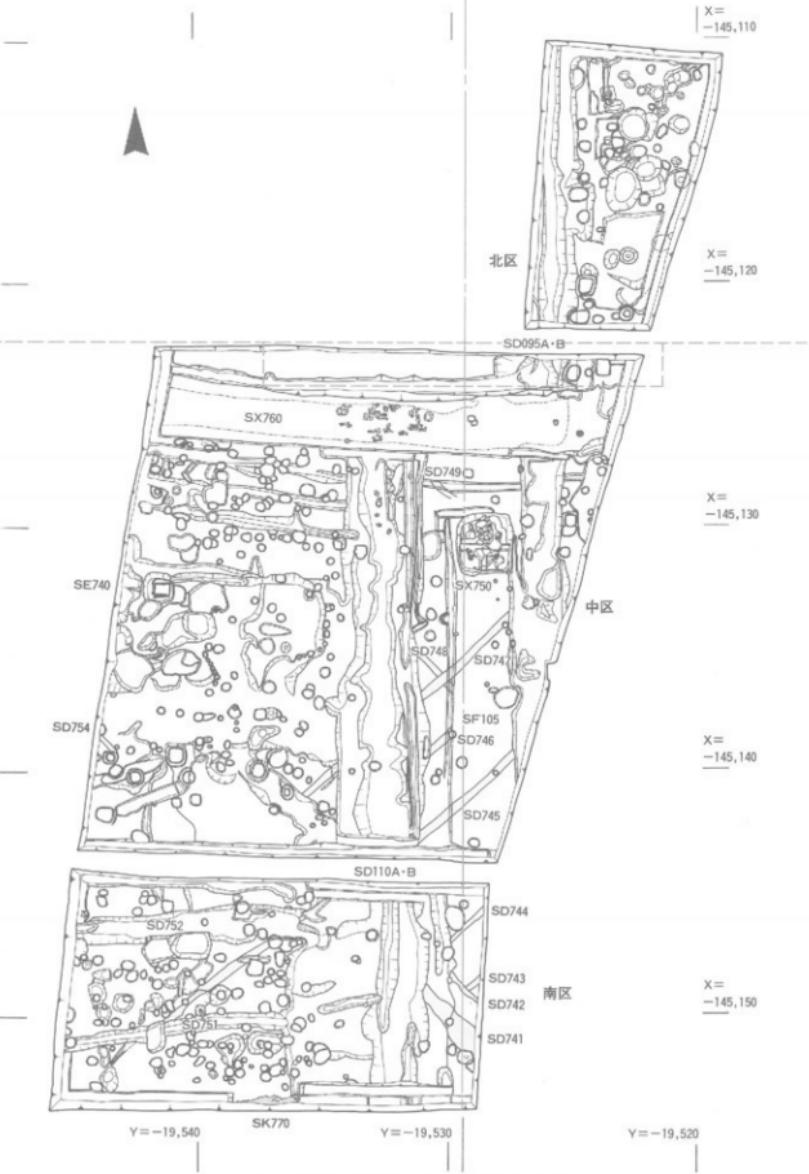


fig.8 金堂・中門北調査区(第306次)遺構平面図 1:200

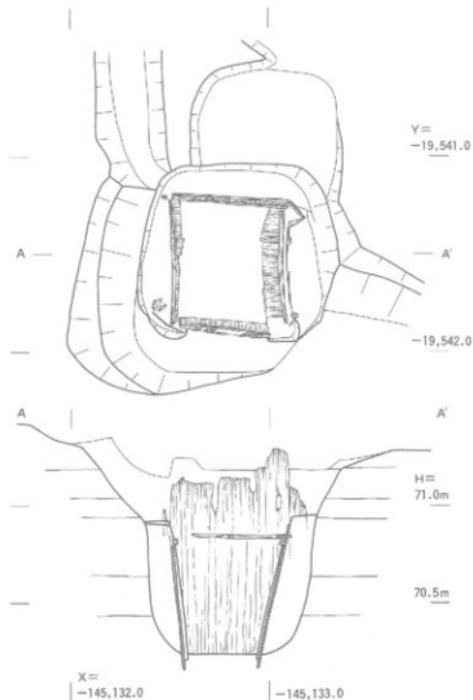


fig.9 SE740平面図(上)・断面図(下:Y=−19.541.55) 1:25

鉢鉢状だが、下部ではすばり約2m四方となる。東西約1.2m×南北1.4m、深さ約2mの縦板の井戸枠を用いている。底には拳大の礫が敷き詰めてあった。仕様としては、まず四隅に幅細の縦板を斜め45度に刺し、次に東西に縦約1.8m、横0.8~1.2m、厚さ3~4cmの一枚板をはめて安定させる。続いて、南北に縦約1.5m、横0.2~0.3m、厚さ3~4cmの板材を数枚ずつはめていき、最後に幅4~5cmの横材で押さええたとみられる。東西の枠板は一部に柄穴があり、厚さからすると床板などの転用材かもしれない。埋土は平城宮以前の土器を含む灰色~暗灰色の粘砂である。特記すべき遺物では、枠内南東隅の最上層(暗灰色粘砂)から小型海獸葡萄鏡が出土した。おそらく井戸を埋める際の儀式で用いられたものであろう。

西隆寺の遺構

SX750 金堂正面のSF105路面上で検出した灯籠の据付穴。東西約2.2m、南北約2.5mの隅丸方形で、深さは中央部分で約0.55mを測る (fig.10)。灯籠の基壇は抜かれていたが、基壇の下に敷く根石を検出した。路面を浅い鉢鉢状に掘り下げ、裏込め土(遺物を多く含む暗茶灰色砂質粘土)を敷き拳大の石を据え、上にほぼ上端を揃えて直径0.35~0.5mの大型の根石を4石据える。根石は大体花崗岩だが、南東の1石は竜山石切石を斜め45度に割り、剖面を上にして据えられていた。この割石は

深さ0.1~0.35m、埋土は黄灰色系の砂質土で、SD095Bより若干新しい平城Ⅲ~Ⅳの土器を多く含む。西に広く改作されていたが、特に南区では同時期の東西溝SD751・SD752が西から流れ込み、幅約6.5mと東西に広がる様子が観察できた。

SF105 右京一条二坊内の西二坊坊間西小路。西隆寺第3次調査検出の南延長部で南北約27m分を検出した。路面は灰褐色粗砂・黄灰色粘砂の地山上面で、路面幅は3.2~3.5m。道路心はX=−145.127.0でおよそY=−19.529.3となり、御藍南北中軸線の振れN 0°19' 50" W(「北で西に0° 19' 50" 振れる」:『報告書1993』)に沿う。下層のSD095AとSD110Aの心心距離はおよそ6.55m(1尺=0.295mとして22尺)となり、第3次調査とほぼ同じだった。

SE740 中区中央西端の地山(灰色粗砂)上面で検出した井戸 (fig.9)。掘形は上部が約2.5m四方の

金堂基壇にともなう石材の可能性がある。また南半部の断割で、根石下の地山（暗茶灰色粘土）直上に小石の抜取痕跡が見つかり、断面観察で暗茶灰色砂質粘土の下に遺物を少量含む暗灰色粘土も観察できた。以上のことから、今回検出した根石は創建当初とは考えにくく、少なくとも1回は据付穴の位置を変えずに根石を取り替え、基壇を据え直した可能性が高いと推測する。遺物は、
掘形理土から平城M、基壇抜取穴埋土から
奈良～平安時代の土器が出上したが、これ
から後構の時期は特定できなかった。

また、SX750の心はおよそX=—145.130.85、Y=—19,528.57で、金堂心（X=—145.110.80、Y=—19,529.05：『報告書1993』との距離は20.06m（1尺=0.296mとして67.8尺）となる。一方、金堂基壇縁との距離は8.4m（28.4尺）、推定南面階段の端との距離はおよそ6.5m（22尺）となる。

SX760 金堂基壇正面の瓦敷（fig.11）。第3次調査の際、金堂基壇南東部で一部確認したが、今回は第3次の珪で残存した部分にあたり、周囲の遺構面より20cmほど高いレベル（標高約71.8m）で検出した。幅1.4～1.9m、西で北に振れながら東西に約16m延びる。仕様は、まずSF105やSD095、SD110の直上に、灰白～橙褐色シルトをベースとして小礫（東半で直径4～5cm、西半で直径2～3cm）を敷き、その上に10～15cm角四方で使用済みの割瓦を、凸面を上に敷き詰める。敷瓦には一部、西隆寺創建時の軒瓦6235C、6775Aなどが含まれていた。さらに、瓦敷の北辺は金堂南面階段の南辺推定部にあたりことから、金堂基壇が存続する時期に敷いた舗装面と考えられる。

西隆寺廃絶後の遺構

SK770 中区・南区で多く検出した瓦磚類の廐棄土坑群の一つ。幅3m以上の大土坑で、調査区外南に続く。遺物包含層（灰褐色砂質土）上面で検出した。

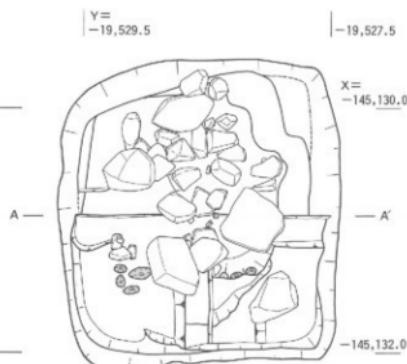


fig.10 SX750平面図(上)
断面図(下:X=—145,130.9) 1:40



fig.11 SX760(西から)

3. 中門・南門調査区（第309次）

調査は調査区を東西2区に分けておこなった。調査面積は両区合わせて406m²である。

基本層序

調査区の基本的な土層は東区、西区とも、上から盛土、水田耕土、床上、茶褐色土、暗茶褐色土（遺物包含層）と続く。その下は道路のベースをなす茶褐色粘土層（東区）、黄色粘土層または灰色粗砂層（西区）であり、主要な遺構はこれらの土層上面で検出した。遺構検出面は現地表下約1.4mで、標高71.2m前後である。

検出遺構

検出遺構は西隆寺の以前と以降とに分かれる。東区北端は中門の、南端は南門のそれぞれ推定位置にあたるが、いずれも後世の削平により、基壇はもとより、基壇の掘込地業、雨落溝など、建物の位置、規模などを直接示す遺構は残っていなかった（fig.12）。

平城京以前の遺構

SD800・801 東区南端で検出した斜行溝。幅約0.3m、深さ0.1～0.2m。溝は国土方眼北に対して西に約50度振れる。埋土は堅くしまった暗褐色粘質土で、土器片が少量出土した。この両斜行溝は本来一連の溝で、後述のSD110により分断されたものであろう。

SD810・811 西区で検出した2本の斜行溝。SD810は幅0.4m、深さ0.2mで、国土方眼北に対して西に約40度振れる。SD811は幅0.2～0.4m、深さ0.2m、国土方眼北に対して東に約40度振れる。両溝とも溝内堆積土は暗褐色砂質土。SD810から須恵器小片が出土した。

SD812・813 西区の東西溝。SD812は幅0.4m、深さ5cm。埋土はこげ茶色砂質土である。SD813は幅0.35m、深さ0.16m、溝は国土方眼東に対して南に約10度振れる。埋土は暗褐色砂質土である。以上の溝のなかには、水田耕作に関係する遺構が含まれている可能性がある。

平城京（西隆寺造営以前）の遺構

SD095 SF105の東側溝。東区の南東隅で、西肩のごく一部を検出した。

SF105 右京二坊坊間西小路。東区を南北に縱断する。路面西端はSD110の侵食を受けるため、広狭がある。調査区南端近くでの路面西端の座標値はX=−145,194、Y=−19,529.5である。路面東端は調査区南東隅で確認したのみで、座標値はX=−145,195、Y=−19,526.8である。遺存路面幅は2.7mほどである。路面には舗装の痕跡は無い。

SD110A・B SF105の西側溝。東区ではほぼ南北32m分を確認した。幅は最大で4.5m前後、深さは、0.5m前後。堆積層は大きく下層（灰色砂層）と上層（褐色ないし暗茶褐色砂質土）に分かれる。調査区南端から北へ約15mほどでは、溝底が検出面から約1.5mと1段深くなる部分がある（SD110A）。溝心は国土方眼北に対して西にやや振れる。東区北半の擾乱北では、上層堆積土の東端を確認したが、西端は調査区外西へ広がっている。

SX803 東区北寄りの土坑。一边約1.4mの不整円形、深さ約0.5mのすりばち状を呈する。埋土は暗灰色粘質土で、遺物は出土しなかった。

SE835 東区北寄りの井戸。掘形は一边約3.2mの不整形方形、深さ約1.7mである。抜取穴出土の井戸枠残材から、縦板組の構造であることがわかる。井戸枠にはスギ、ヒノキを混用している。抜取穴からは他に土器、瓦、曲物などが出土した。土器は奈良時代のもので、須恵器、土師器の破片が多

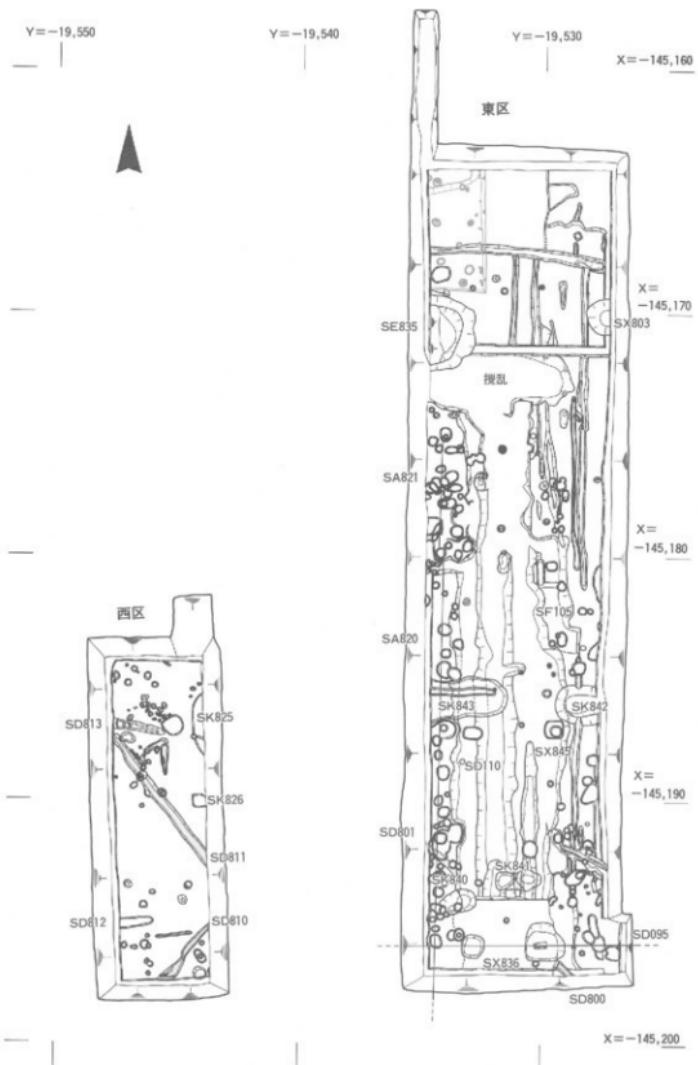


fig.12 中門・南門調査区(第309次)遺構平面図 1:200

量にある。須恵器鉢Dの完形品を含む。出土軒瓦には軒瓦編年Ⅲ-1期（天平17年～天平勝宝元年）の軒瓦6721Eが出土している。この遺構の所属時期に関して一言しておく。この遺構の图形はSD110上層の堆積土上面で検出したものである。しかし、本来の掘込み面が残っておらず、遺構の時期の上限は層位のみでは明らかでない。ただし、中門や南回廊に接する位置関係から見て、西隆寺存続期とは考えにくく、西隆寺創建以前、または西隆寺廃絶後のいずれかであろう。出土遺物のうち、土器は詳細な時期の限定はできない。一方、瓦には西隆寺創建以前の軒瓦がある。もちろん、位置的にSD110の遺物が二次的に入り込む可能性があり、遺物のみでは時期の限定はできない。明確に西隆寺廃絶以後とみられる土器は含まれておらず、かつ軒瓦の様相からみると、西隆寺創建以前である可能性がより高いと推定し、この時期に含めて記述することにした。

SA820・821 南北扉。SD110の西方に多数の穴があり、まとまりを見出すのは困難をともなうが、そのうちいくつかは壠の柱穴とみられる。SA820はSD110の西脇から約1.5mの位置にあり、東区の南端から北へ8間分を確認した。柱間は1.5～2.4mと一定しない。SA821は、その北の南北扉で、3間分を確認した。柱間は南から2.0、2.7mである。ともに十五坪の東端を削る扉とみなされよう。
SK825 西区北よりで検出した土坑。南北2.6m、東西0.4m、さらに調査区外東に広がる。深さは0.5mまで確認したが、崩壊の危険のため、掘削を断念した。埋土は暗褐色砂質土で、多量の炭化物と共に輪羽口や、須恵器壺などの土器が少量出土している。金銅工房関連の遺物を廃棄した土坑とみられる。
SK826 西区SK825の約2m南にある小土坑。南北0.5m、東西0.6m、深さ0.1m、土器がごく少量出土した。

西隆寺廃絶後の遺構

SK840～843 瓦を廃棄した土坑群。東区南半部の4箇所に集中する。多量の瓦片が投棄されていた。位置からみて、南門または南面墓地所用の瓦を廃棄したものであろう。

所属時期未確定の遺構

SX836 東区南端の2箇所の大型の掘立柱穴。いずれも現状ではSD110上層堆積土上面で検出した。東側柱穴は一辺約1.6mの不整形を呈し、深さ0.7mあり、底に木製礎板がある。礎板は長さ約61cm、幅約29cm、厚さ約4cmのヒノキ材で、下部は調整し、上面は削ったままである。西側柱穴は图形は一辺が約0.9m、深さ0.6mの不整形を呈する。両柱穴の間隔（心心）は約2.7m（9尺）である。2柱からなる門状の施設が想定できよう。SX836の東方約2.5mに、柱筋の揃う柱穴が1箇所あり、門に取付く扉の可能性がある。なおこの柱穴の柱根跡から銀製細板が出土した。SX836東柱穴の柱抜取穴には凝灰岩切石片や、玉石が投棄されている。抜取りの時期は、ほぼ西隆寺南門廃絶後とみなしてよいと思われるが、上限については、SD110上層堆積が進んだ以後としか限定できない。したがって、西隆寺存続期にさかのぼる可能性がある。仮に西隆寺期とすれば、南門との共存関係が問題になる。今回の調査では、南門の位置を決定できる資料は得られなかつたが、SX836が門の位置に近接する位置にある可能性が高いことは言えよう。

SX845 東区の柱穴。SK842の南西にある柱根（直径約0.3m、残存高0.43m、ヒノキ材）を残す柱穴（一辺0.4m、深さ0.5m）である。これと関連する柱穴は調査区内にはみあたらず、建物、廻などのまとまりがつかない。遺構の上からはSD110との前後関係などは不明で、時期の限定が困難である。

III 遺 物

出土した遺物のうち最も量の多いものは瓦類で、次いで土器類があり、他に少量の金属製品、石製品、木製品、鋳造関係遺物がある。

1. 瓦磚

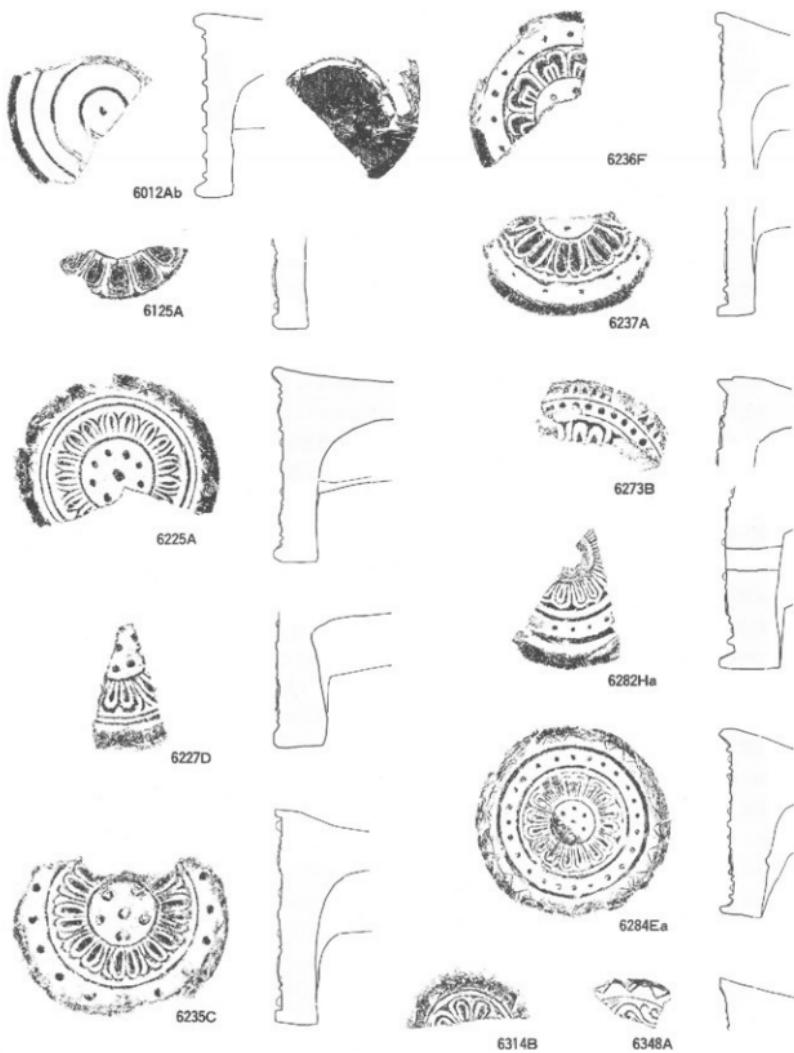
3次にわたる発掘調査で、調査区全域から瓦が出土した。まとまって出土したのは、瓦堀裏土坑であり、他に遺物包含層、条坊側溝などからも少量出土している。瓦類は軒丸瓦103点、軒平瓦198点、丸瓦11,945点(1,254.2kg)、平瓦40,218点(4,071.9kg)、道具瓦53点(内訳は、鬼瓦1点、隅切平瓦1点、熨斗瓦13点、面戸瓦6点、磚32点)である。他に刻印瓦が9点ある。

以下、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、熨斗瓦、面戸瓦、刻印瓦、朱付き軒平瓦の順に解説し、最後にまとめを述べる(tab. 1, fig. 13~15, PL. 6・7)。

軒丸瓦 6012Ab: 重圈文軒丸瓦。6012Aaの中央の珠点、および圈縫を太く、深く彫り直したもの。瓦当面から約1cmに範端痕跡の段を残す。裏面に布目を残す。丸瓦先端部の剥離した部分にも布目が連続しており、布目は丸瓦接合前についていたことがわかる。接合粘土はごく少量で、裏面接合部の下側には粘土を補足する前につけられた円弧状の浅く狭い溝状のあたりがある。丸瓦接合時になでたものか。瓦当侧面および轍面下半周縁はヘラ削り調整。胎土に砂を少量含む。色調は内部が灰白色、外面が灰黒色を呈し焼成はやや軟質。図はSD110上層出土品。**6125A**: 瓦当裏面は縱方向のナデ(幅広で深い)で調整する。図はSD110上層出土品。**6225A**: 瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて幅広で深い縱方向のヘラ削り調整。「積み上げ技法」による。砂粒を多量に含む。図はSK795出土品。**6227D**: 6225に比べ弁は平板な表現。瓦当裏面は上に向って薄くなる。多量の砂粒を含み、赤~灰褐色、軟質の焼成。図はSD110上層出土品。本型式は京内で目立つ型式。**6235C**: 瓦当裏面を縱方向にえぐるように削る。砂粒を多量に含む。表面が黒灰色、内部は灰色で、軟質の焼成。図はSK842出土品。**6235I**: 小片で第306次調査区の灰茶砂質土などから出土。**6236F**: 子葉がくぼんで表現される。図はSK770出土品。**6237A**: 図はSK728出土品。**6273B**: 外縁に凸鉛歯文をめぐらす藤原宮式。

tab.1 軒瓦・一覧

調査区 軒丸瓦	北面回廊・金堂 (第299次)	金堂・中門北 (第306次)	中門・南門 (第309次)	点数	調査区 軒平瓦	北面回廊・金堂 (第299次)	金堂・中門北 (第306次)	中門・南門 (第309次)	点数
6012Ab			1	1	6641C			1	1
6125A		2		2	6647B			1	1
6225A			1	1	6663Cb			2	2
6225?	1			1	6664C			1	1
6227D	1			1	6664I			1	1
6235C	5		13	18	6668A			5	5
6235I	3		3	6	6681A			1	1
6235?	8			8	6691A			2	2
6236F		9		9	6710A			1	1
6237A	1			1	6719A			1	1
6273B		1		1	6721C			1	1
6282Ha	1			1	6721E			1	1
6282?	1			2	6721?			1	1
6284Ea	1			1	6739A			2	2
6314B			1	1	6761A	10	14	14	38
6348A		1		1	6764A	3	12	1	16
不 明	6	33	9	48	6775A		6	2	8
軒丸瓦計	9	65	29	103	軒平瓦計	35	111	52	198



0 10 20 cm

fig.13 軒丸瓦拓本・実測図 1:4

瓦当面から1cmの位置に範端痕跡を残す。裏面、接合部に指頭圧痕が深く残る。胎土に白色の砂粒を含み、灰青色を呈し、硬質の焼成。図は第306次調査区の遺物包含層出土品。**6282Ha**：瓦当裏面表面は剥離。中房中央に孔（直径約2cm）をもつ。孔は焼成後の穿孔。垂木先瓦として使用されたか。図はSD095上層出土品。**6284Ea**：瓦当部ほぼ完形。範の抜けがシャープ。丸瓦の取り付け位置は低く、丸瓦との接合部を深くえぐる。外面は黒灰色、内部灰白色、胎土には砂をほとんど含まない。進存状態が良好である。図はSD110上層出土品。**6314B**：小型の軒丸瓦。周縁が摩耗している。丸瓦部の取り付け位置は低い。図はSD110下層出土品。**6348A**：外区内縁に唐草文をめぐらす。中房部分が残っておらずa、b、cのいずれであるかは不明。周縁端部をヘラ削りで面取り風に調整する。胎土は緻密で、灰青色、硬質の焼成。図は第306次調査区の後世の耕作溝出土品。

軒平瓦 **6641C**：図示したSD110上層出土の1点のみ。**6647B**：変形忍冬唐草文で、藤原宮式。図は第309次調査区西区の遺物包含層出土品。**6663Cb**：図はSK770出土品。**6664C**：図はSD110上層出土品。**6664I**：この型式は遍例、貼付段頸であるが、本例は削り出しの段頸である。瓦当面と平瓦部との角度が大きく鈍角をなす特徴もある。図はSD110上層出土品。**6668A**：図(右)は唐草文左第1単位付近に縱方向の大きな範削痕がある。SX760に転用されていたもの。図(左)の平瓦部凸面は、縦縛印きで、頸から5cm幅でヨコナデする。第306次調査区の遺物包含層出土品。**6681A**：焼成軟質。図はSD110上層出土品。**6691A**：唐草文第4単位と第1支葉との間の2箇所に彫り込みがある。図は第309次調査区の遺物包含層出土品。**6710A**：上外区、下外区に「×」を彫り込む。左第1単位主葉と第3単位主葉に範傷が認められる。左第3単位のそれは、左脇区界線にとどまり、上界線までは達してはいない。図はSK770出土品。**6719A**：短い段頸で、平瓦部凸面は縦縛印き。胎土に砂粒を多量に含み、灰褐色、硬質の焼成。図は第306次調査区の後世の耕作溝出土品。**6721C**：図は第306次調査区遺物包含層出土品。**6721E**：図はSE835井戸枠抜取穴上層出土品。**6739A**：第306次調査区の遺物包含層出土品。**6761A**：ほぼ完形の軒平瓦。図はSK843出土品。**6764A**：図はSK727出土品。**6775A**：曲線頸。微細な砂粒を多量に含み、灰色、堅緻な焼成。平瓦部凹凸両面に表面が剥がれた痕跡があり、焼成時か、あるいは凍結などによる割がれか。図はSK770出土品。

丸瓦 胎どが小破片となっており、全形の分かる資料は少ない。図示した丸瓦は全長34.8cm、広端外径が17.0cm、凹面には布目を残し、凸面には縦縛印きの後広くすり消す。SK770出土品。

平瓦 図示した平瓦は全長38.8cm、狭端長が25.2cm、広端は復元長約29cmである。凹面の布目は両側縁から2cm前後入った部分までで、一枚作りの痕跡を示す。凸面は縦縛印きで、狭端から約10cmの部分に調整の指圧痕が並列する。第306次調査区の遺物包含層出土品。

鬼瓦 鬼面瓦の目玉部分の小片が1点ある。型式は不明。第309次調査区西区の遺物包含層出土。**熨斗瓦** 平瓦凹面に浅いス線（分割線）を入れて分割しているものが4点出土した。分割線は幅0.1cm、深さが0.2~0.3cm前後のものが多い。熨斗瓦の幅に関しては12.5cmとわかるものが1例ある。他の3点はいずれも小片で、分割線を残したままのものであり、平瓦として用いられたものか、あるいは別の位置で割って熨斗瓦として使用したものか判別困難なものである。以上は第309次調査区の西区遺物包含層からの出土品である。この他、焼成後に平瓦を打ち欠いて熨斗瓦に使用したもの的存在も想定されるが、確実に認定できるものはなかった。

面戸瓦 丸瓦を焼成前に分割し、台形に調整したものが6点出土した。全形のわかるものはない。SK706から1点、SK770から2点、他は後世の耕作溝からの出土品である。丸瓦を焼成後に打ち欠い

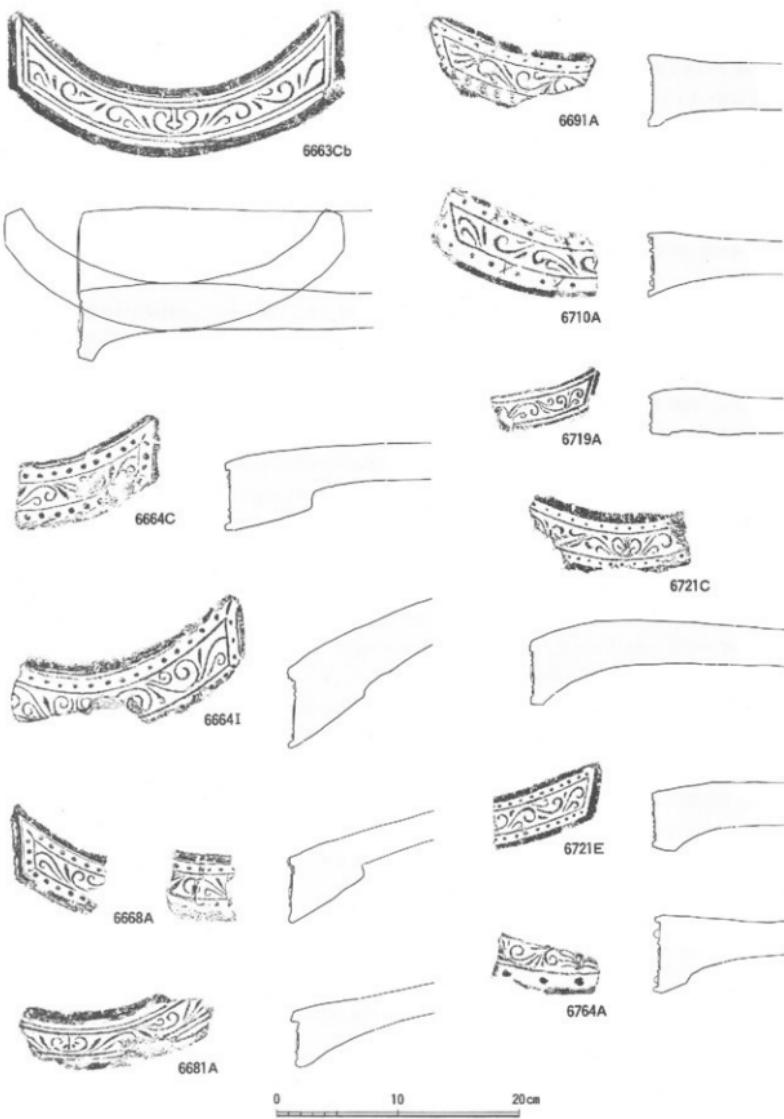


fig.14 轩平瓦拓本・実測図 1:4

てつくったものについては確実に認定できるものは無かった。

刻印瓦 **A**: 平瓦凹面に「上」の左右逆字が印されたもの。SK700出土品。西隆寺では、これまで「上」の正字の出土例はあるが、逆字は初例。**B**: 平瓦凹面に印されたもので、上下2文字あり、上は不明、下は逆「T」字状を呈する。SK841出土。同一原体によるものが、これまで東門地区から3点、中門・南門地区から1点出土している（『報告1976』、『報告書1993』）。上の文字は「履カ」と仮説してきているが検討を要する。この他、SK841から逆「T」らしき文字を印した小片が出土している。**C**: 平瓦凹面に「理」の文字が印されたもの。第306次調査区の築地土（灰茶砂質土）から出土。スタンプは縦1.6cm、横1.9cm、のやや横長の方形。「理」はこの他、SK770および第309次調査区の遺物包含層（茶褐色）からも各1点出土している。**D**: 平瓦凹面に、縦に文字を印したもの。上から「上」、「木」、「工」、の組み合わせ文字か。さらにもう1点出土している。**E**: 平瓦端面にスタンプされたもの。現状では「大」に見えるが、上部が欠けており、過去の出土例を参照すると「矢」である可能性が高い。第309次調査区の遺物包含層出土品。「矢」とすれば西隆寺では初例。**F**: 平瓦端面に「日」の文字が印されたもの。第306次調査区の遺物包含層出土品。西隆寺では初例。

朱付き軒平瓦 軒半瓦凹面の瓦当寄りに、瓦当面と併行して朱線の見られるものがある。茅負に塗布した顔料が付着したものである。型式の判明するものはいずれも6761Aで、朱線の位置は瓦当面から11.0cmのものが3例あり、そのうち1例を写真に掲げた。他に、11.5cmのものが1例ある。他の2例は、瓦当部が剥落しており、朱線は、半瓦部底端から約26cmと約27cmの位置にある。形態、製作技法、胎土などの特徴は6761Aと共通する。

まとめ 西隆寺関係の瓦で、まとまって出土したのは、瓦廐棄土坑である。軒瓦について集計すると、6235C～5点、6236F～1点、6237A～1点、6761A～20点、6764A～3点、6775A～1点、6710A～1点となる。軒瓦編年（『平城報告ⅩⅢ』）にしたがうと、Ⅲ～2期：6710A、Ⅳ～2期：6235C、6236F、6761A、6764A、6775A、Ⅴ期～平安初め：6237Aとなる。西隆寺造営に先行する6710Aを除けば、創建時の6235Cと6761Aが主体を占め、若下時期の遅れる瓦が少量混じる状況である。さらに、個々の建物の所用瓦の推定の手がかりとして廐棄土坑の位置をみると、金堂に近接するSK697他（第1群）、中門位置に近接するSK770（第2群）、南門位置に近接するSK842・843（第3群）の3群に分けることができる。第1群では6237A、6761A、6764A、第2群では6236F、6761A、第3群では6235C、6761Aが主体を占め、それぞれ近接する金堂、中門・回廊、南門の所用瓦と推定できる。

西隆寺造営以前の瓦を軒瓦編年にしたがって、分類すると以下のようになる。

I～1期：6284E a、6273B、6647C、6641C、6641I、6647B、6668A、I～2期：6348A、6664I、II～1期：6314B、6681A、II～2期：6012A b、6282H a、6719A、II～IV～1期：6691A、II～2～III～1期：6225C、6663C b、III～1～2期：6721E、III～2期：6710A、6721C、IV～1期：6227D

このように時期的には平城遷都当初から、西隆寺造営直前の時期までのものがあり、条坊道路側溝、井戸抜取穴、土坑、遺物包含層などから散在して出土している。西隆寺造営以前には瓦を葺いた遺構を見出す事は出来ず、これらの瓦の使用状況は不明とせざるを得ない。

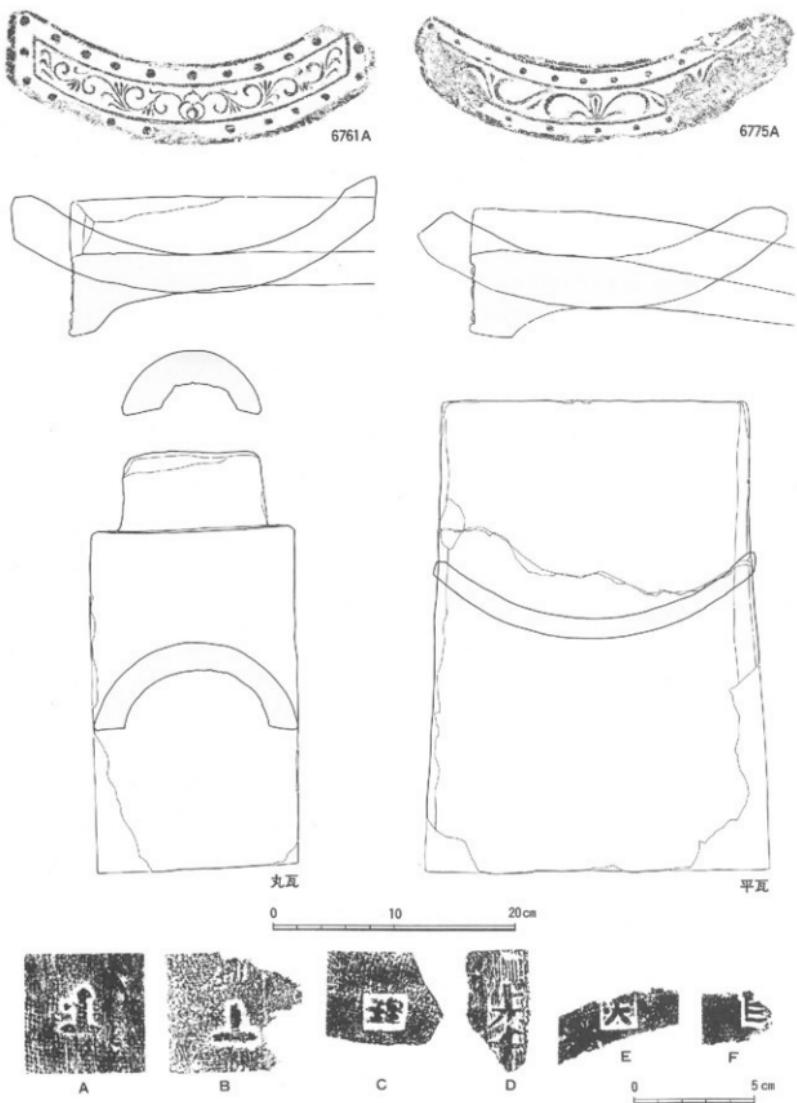


fig.15 軒平瓦・丸瓦・平瓦・刻印瓦拓本、実測図 1:4, 1:2

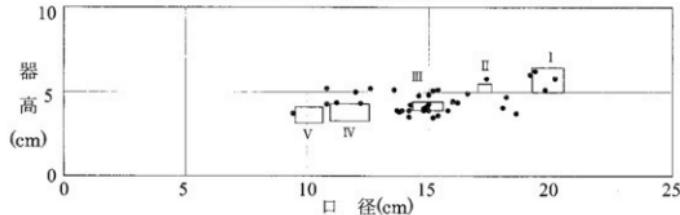
2. 土器・土製品

3次にわたる調査で出土した土器・土製品は整理用コンテナにして総数約60箱分に相当する。大半が古代の遺物であるが、それ以外にも弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器および埴輪などが古代の遺構の上下から出土している。他方、西隆寺造営以後の遺物はほとんど出土しておらず、大規模な後世の削平があったものと考えられる。また、古代の資料に関しては、西隆寺の廃絶時期を決定付ける良好な証拠を得ることはできなかった。

以下では、条坊側溝出土の土師器、須恵器を中心に詳述する。それ以外の遺構では、土坑や井戸からの出土も少なくないが、溝と重複するものは溝内の資料を捨っている可能性も捨てきれず、いずれも平城M以前と言及するに留めたい。また、遺物包含層や整地上より出土した資料も相当数あるが、調査時の所見で整地土ないし遺物包含層として認識された上層には、接合や編年検討を経ても側溝出土との明確に区別できない資料を含むものがある。特にSD110を覆う暗茶褐色土では、溝の直上のみ大量に土器が出土しており、下層の溝埋土器とも一部接合関係にあることがわかった。したがって、この資料については、溝の上層資料として扱っていることを付言しておく。

SD110 (fig. 16-1~33, PL. 8) 土師器には杯A・B・C・E、皿A・C、碗A・C、杯B蓋、鉢A・X、高杯、盤、壺A・B、甕、瓶、甕、製塙土器など、須恵器には杯A・B・C・E、皿A・B・E、碗A、杯B蓋、皿B蓋、鉢A・D・E、盤、壺A・B・C・K・X、平瓶、甕などの器種が確認できる。なお、図化したものは大半が下層埋土出土の資料である。まず、須恵器杯A・Bの法量分布を検討したい。出土量の多い杯Bに注目すると(tab. 2)、口徑からI (17)、II (18・19)、III (20・21)、IV (22)、V (23)の5群が存在しており、比較的口径の大きいII～IV群では器高の高い一群と低い一群があるようである。『平城報告Ⅶ』を参考にすると、その分布は平城ⅨのSK820の様相と類似することが指摘できる。資料数が少ないながら、杯A (12~16)についても同様の検討をおこなった結果、やはりSK820に近い様相が指摘できた。このことは、土師器杯、皿類にみる略文の特徴や調整手法、そして碗Aの一定量の存在などとともに、これらの一一群がSK820と併行する時期のものであることを示している。なお、SD110上層埋土 (暗茶褐色土) の資料は、土師器にC手法の比率がより多く見られること、須恵器杯B蓋の形態が端部付近で短く屈曲する新しい形態が目立つことなどから、下層に比べて平城Mの様相が強まっていることが指摘できる。すなわち、SD110埋没以後、ほどなくして西隆寺が築かれたと思われるが、下層と上層との間に断絶はないものと思われる。この他注目される遺物として、「洗」状の器形の土師器(8)が1点、いわゆるロクロ土師器(10)が1点、「美濃」のヘラ彫きをもつ須恵器(27)などが出土している。

tab.2 SD110出土須恵器杯Bの法量分布図(棒は『平城報告Ⅶ』のSK820)



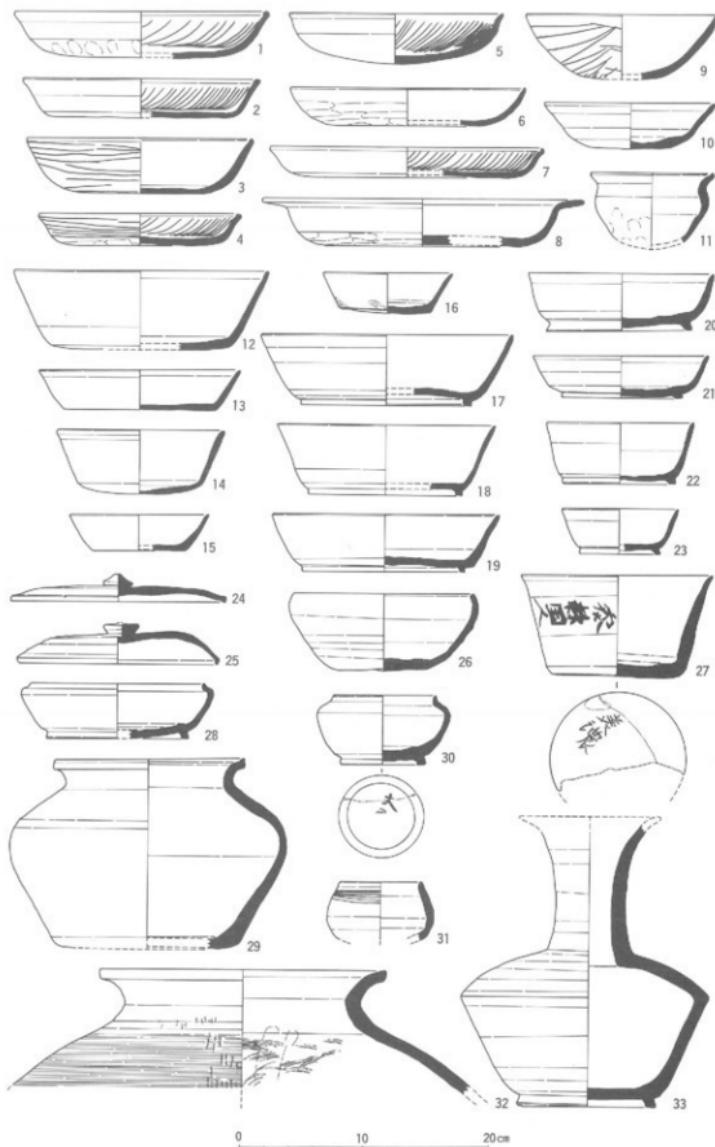


fig.16 SD110出土土器実測図 1:4

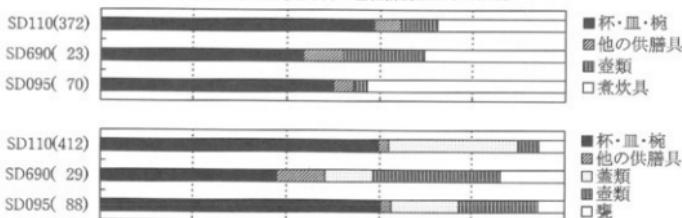
SD690 (fig.17-34~51, PL. 8) 他の条坊側溝と比べ、出土総数は少ないが、土師器壺、須恵器壺類といったやや大型の個体の残存率が高く、土師器杯Aがきわめて少ない傾向が指摘できる。土師器には杯A・B・C・E、皿A・C、椀C、杯B蓋、鉢B、高杯、壺A・B、壺A・C、甌、甌、須恵器には杯A・B・C・E、皿A・B・E、椀A、杯B蓋、皿B蓋、鉢A、盤、壺A、平瓶、甌がある。土師器杯Aに連弧暗文が確認できること、土師器の調整手法にa手法が目立つこと、そして椀Aが見られないことから、奈良時代前半の様相が強い。個別資料としては49の壺は体部中心に口縁の付かないもので、他にあまり例をみない。なお、40は播磨窯とおもわれる精製品で重量感がある。

SD095 (fig.18-52~61, 63, PL. 8) SD690と坪の北西隅で合流することから、両者の内容の比較は興味深い。土師器には杯A・B・C・E、皿A、椀C、杯B蓋、鉢B、高杯、盤、壺A・B、壺A・C、甌、甌があり、須恵器には杯A・B・E、皿A、椀B、皿B蓋、鉢A、盤、壺K・Q、平瓶、甌A・Bなどが確認できる。図は一部上層の資料(52など)を含むが下層資料が中心である。杯E(55)や杯A(56)の外面にヘラミガキが施された須恵器が存在しており、前述の40との類似が指摘できる。また、大型の杯B(59)は平城IIのSD485や平城IIIの古段階であるSD5100などにある杯B I-1に相応するもので、総じてSD110の資料に比べ、縦年に古い様相をうかがわせる。SD690との合流は両側溝から出土した古墳時代後期の高杯の破片が接合したことからも明らかで、下層埋土の内容の類似もそのことに起因すると思われる。すなわち、坪の北西隅をはさんだ両側溝の少なくとも下層は、平城II~IIIの古段階のうちに埋まってしまっていることが推察できるのである。

以上見てきたように、坊間西小路をはさんで、東西の側溝に見られる内容が異なることは、各坪の利用形態の差によるものと考えられる。おそらく、東側溝は排水溝としては、いち早く機能しなくなり、主として西側溝がその機能を担ったのであろう。また、製塩土器(65-66)がほぼSD110に限って出土しており、鍛冶関連の遺物が同様の集中を見せることから、西側が工房などに関わる区画であったことを示唆するものであろう。この製塩土器は内面に布目や刷毛目を残さない砲弾形のもので、紀淡海峡付近が产地と考えられる。この他、調査区全体では土馬が30点前後、蹠脚硯が1点、細長い瓶形の青磁底部片(62)が1点、三彩の破片が3点、獸脚甌(64)などが出土している。

さて、上記3側溝資料に対し、定量分析を通じた比較を試みた(tab. 3)。用いた方法は、原則として土師器、須恵器のいずれも口縁部の残存率が8分の1以上のものを1点と数えた。土師器と須恵器の比率はおむね1:1で、平城宮内の全体的傾向に一致する。器種構成を比較した結果、資料数に偏りがあるもののSD690には須恵器貯蔵具が多く、個体の残存率が大きいこととあわせて注目される。なお、前述の時期差は器種構成の違いとなって現れていない。

tab.3 土師器(上)と須恵器(下)の器種構成(括弧内は資料数)



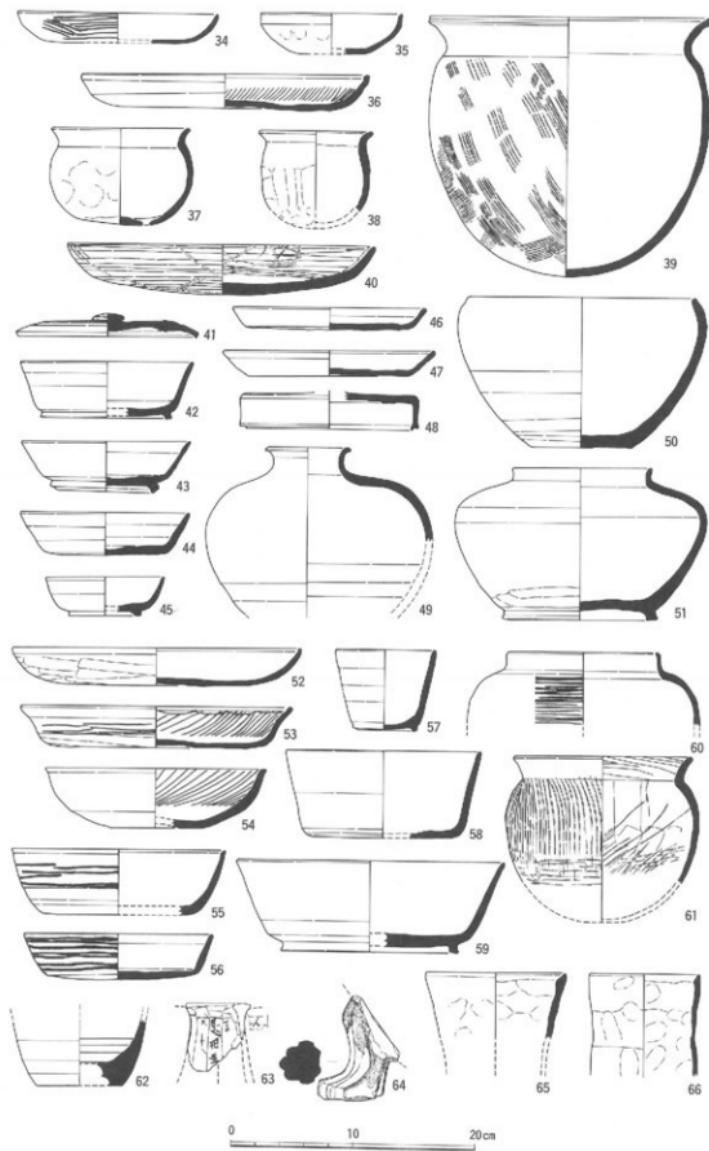


fig.17 SD690(34~51)・SD095(52~61・63)他出土土器実測図 1:4

3. 木製品・金属製品その他

木製品 曲物の底板片、燃えさし、加工棒などがある (fig.19, PL. 9)。1は曲物底板の断片。長さ10.3cm、幅2.2cm、厚さ4mm。ヒノキの板目板を用いており、側縁に釘孔をもつ。推定径14.2cm。SE835抜取穴込下層出土。

金属製品 銀、銅、鉄、鉛等の製品・素材がある (fig.19, PL. 9)。2は銀製帯先金具。頂部中央に対葉花文を、基部左右に楕形花を配した花唐草を透かし、裏面に3本の鈎足をもつ表金具である。長さ1.81cm、幅1.64cm、厚さは頂部0.36cm・基部0.15cm。ほぼ純銀製で2.8g。SD095上層出土。「衣服令」によれば、一品以下、五位以上の朝服として金銀袋の腰帶、武官の礼服・朝服として衛府の脇・佐に金銀袋の腰帶とともに金銀袋横刀の佩用が許されていたことが知られる。本例では直面の形状から推定される帯の幅が1.5cm程とかなり細いことから、腰帶よりもむしろ佩具、あるいは刀子を含めた刀装や馬装などの用途が想定される。たとえば刀装としては、東大寺大仏殿鍛壇金銅莊大刀とともに出土した小型の帯先金具(紐先金具)がある。帯執縫の先金具になろうか(上田三平「東大寺大佛殿須彌壇内に於て發見せる遺寶に就て」『學業』8号1927、帝室博物館『天平地質』1937)。また、鎬の形状等に本例との差異はあるものの、正食院北倉金銀錫莊大刀、あるいは中倉の刀子鞘装具などに唐草文をモチーフとした銀(鍍金)透金具の多用をみることができる。

3は銀製細板。長さ6.5cm、幅3.7mm、厚さ1.5mm。3.62g。一端は盤により切断されている。SX836の束に取り付く環の柱穴柱痕出土。

4は経軸頭金具。頂部径19mmの円筒形で、現存高20mm。厚さ約1mmの銅板に鍍金をおこない、頂部上面および側面には、線彫りにより花文を表現した後に魚子をその周囲と中房部分に打つ。魚子は、径1mmで正円ではなく半円になるものが多く、重複も日立ち不揃いである。遺物包含層出土。5は銅製瑠璃。銅鏡の口縁部を転用したもので、本来は口唇部を一方の長辺とし、長さ40mm、幅17mmの長方形に加工されていたものと推定されるが上半1/3を欠く。上端から約1cmの位置に、径3.0mmの円孔を穿つ。本来の銅鏡は、推定口径21cm以下、口縁部は断面三角形状に内側に肥厚する。SD095内の小穴SX695出土。6は海獸葡萄鏡。小型海獸葡萄鏡の内側のみを独立させたもので、径3.7~3.8cm。わずかに橢円になる。鏡の周間に四瓣紋を配し葡萄唐草がそれを取り巻くが、文様は不鮮明である。SE740柄内最上層から単獨で出土。7・8は銅帶金具で丸柄表金具および鈎尾表金具。いずれも表面にわずかではあるが漆が遺存する。ともにSD110出土。

9は鉄斧。有袋斧でわざかに刃をつくる。長さ4.9cm、刃部幅3.5cm。袋部の横断面形は方形を呈し、左右の折り返しは合わせ目が「ハ」字状に開く。SD110上層出土。10は小型の鉄製U字形鍔・鍔先。刃部は強い曲線を描き内側に溝をつくる。左右の耳端部を欠くが推定刃部幅5cm程度。SD095出土。鉄製品にはこの他に釘はじめとする多数の断片がある。11は船鉤。皿形を呈し、一端が舌状になる。132.18g。整地上出土。12は銅製の笄。平城京以後のものであろう。遺物包含層出土。

銭貨 和同開珎1点がある (PL. 9)。劣化が著しく細片化している。「開」の門構えは隸書風につくる。SE835抜取穴上層出土。

石器・石製品 奈良時代以前のものにサヌカイト製の石礫、剝片、石核がある (fig.20, PL. 9)。13は両面加工の無茎球。凹基で側縁が直線状をなす。遺物包含層出土。14はSE835掘形、15はSE740裏込め出土。奈良時代以降のものには、六角小塔の屋蓋・基座、砾石などがある (fig.20, PL.

9・10)。16は六角小塔の屋蓋。2点の破片が接合する。1辺が約6.1cmの六角形で1/2を欠く。石材は花崗岩で雲母片を多量に含む。上面には隣棟を、下面には4段に垂木・斗拱を表現する。棟先には下面から、径1.2mm、深さ約4.5mmの小孔を1孔ずつ穿つ。破断面で観察するかぎり孔径は一定で、中心に向かってわずかに傾斜する。おそらく風鐸あるいは瓔珞状のものが装着されていたのであろう。17は基底。平面が1辺7.9cmの正六角形、厚さ1.9cmの板石で約1/2を欠く。全体の風化が著しく判別が困難であるが、石材は花崗岩系の可能性がある。上下の面で状態が異なり、丁寧に研磨されている面が上面、研磨が認められず荒い状態の面が下面と考えられる。側面は上面と同様である。下面には一定方向の線条痕がみられる。中心からわずかにずれた位置に径5mm程の貫通孔がある。後述する正倉院三彩塔の基座を参考にすると、心柱を支えるための孔であろう。屋蓋・基底とともに、金堂南面の遺物包含層出土。こうした六角小塔の遺品には、石製品に正倉院南倉白石塔残欠、陶製品に同三彩塔(磁塔)、平城宮馬廄東方地区出土黄釉屋蓋がある。正倉院三彩塔の基座は、1辺7.7cm、長径15.3cm、短径13.4cm、厚さ1.7cmとされ(橋崎彰一「三彩塔」『国華』982号 1975)、西隆寺出土の石製基座とほぼ同形同大であることは注意してよい。

砥石は総数21点出土した。18~28は方柱状・梯形状を呈するもので、石材は流紋岩・石英斑岩系。27はバチ形を呈する長さ14.8cmの大型品で5面を使用する。

S E740埋土出土。28は一端に径7mmの孔をもつ提げ砥石である。孔をさかいに浅い段がつく。SD110出土。また18・26では、小口に1mm間隔の平行する条線が観察される。

29~31は大きな凹面を有するもので29・30は砂岩系、31は片麻岩系の石材を用いる。32は丸棒状のもので片岩系。33は灯籠据付穴SX750の北辺から出土した厚さ4.8cmの板石断片。溶結凝灰岩系。節理面に擦痕を残すが出土状況や石材などから本来は基礎化粧などの建築材料であった可能性もある。出土砥石には形態と石材との対応関係が認められ、この構成は右京八条一坊十三・十四坪など從来平城京内においてみられたありかたに近い。

この他にSD110上層より水晶片が出土している。

鉄造・鍛冶関係遺物 鞍羽口は7点出土した。34・35は、外径5cm前後、内径2.4cmのもの。外面は面とり状の凹面が連続する。ともにSD110出土。36は内径2.5cmで前者とほぼ同様であるが外径が6.8cmと一回り大きい。外面には長軸方向に10条前後の凹線状の圧痕がみられる。SD110出土。

鉄津は小片も含め32点、計2,364.65g出土した。

鞍羽口および鉄津の平面分布をfig.18に示した。両者はともに第309次調査区に集中し、なかでも西二坊坊間西小路西侧溝SD110の範囲に数多く認められる。このことは、西隆寺造営以前の十五坪に、金属器製作に関わる何らかの施設の存在したことと示唆しているといえよう。

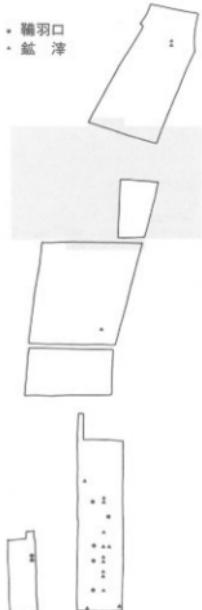


fig.18 鉄造・鍛冶関係遺物分布図

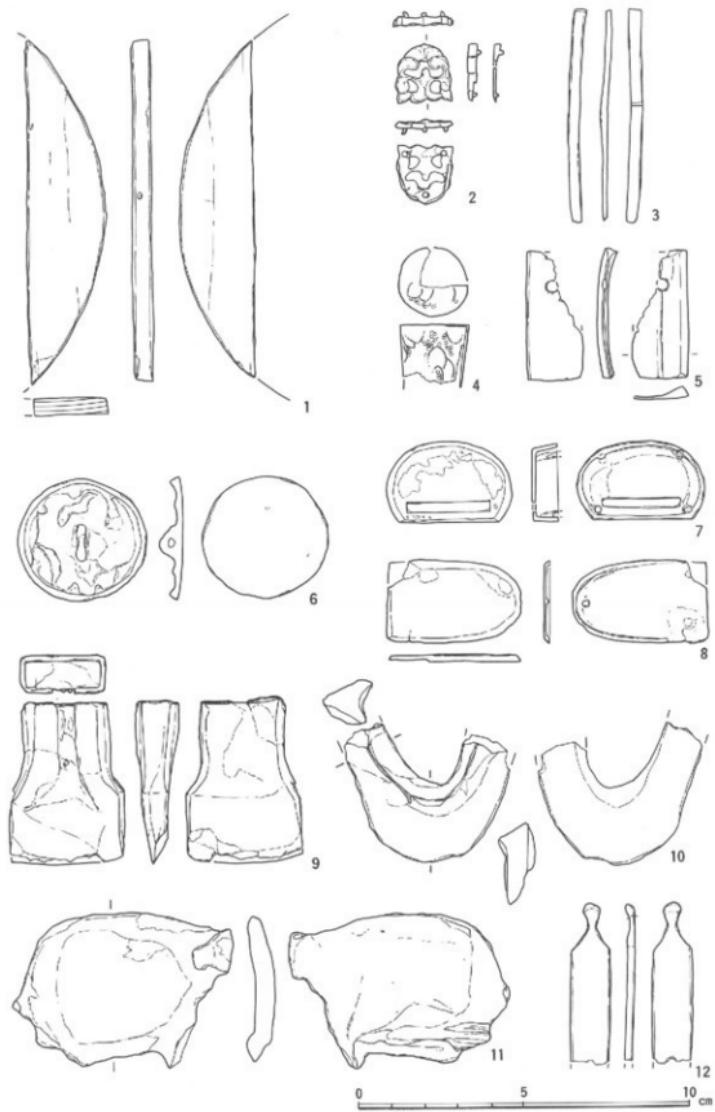
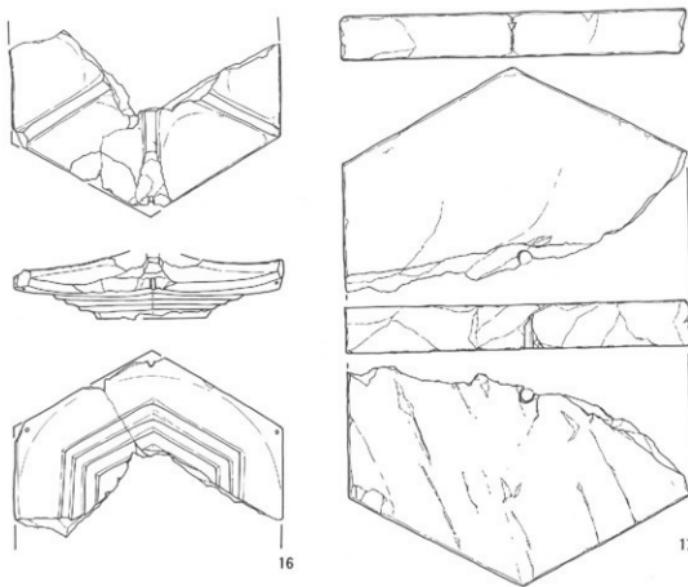
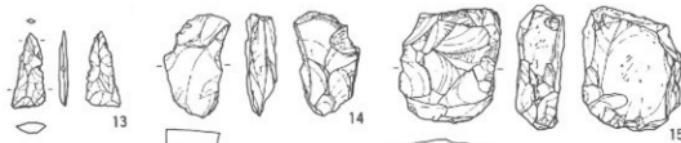


fig.19 木製品・金属製品実測品 2:3



0 5 10cm

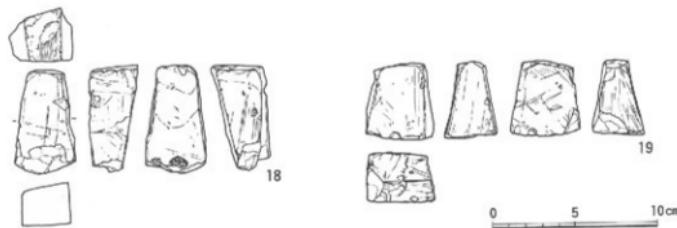


fig.20 石器・石製品実測図 1:2, 1:3



fig.21 石製品実測図 1:3

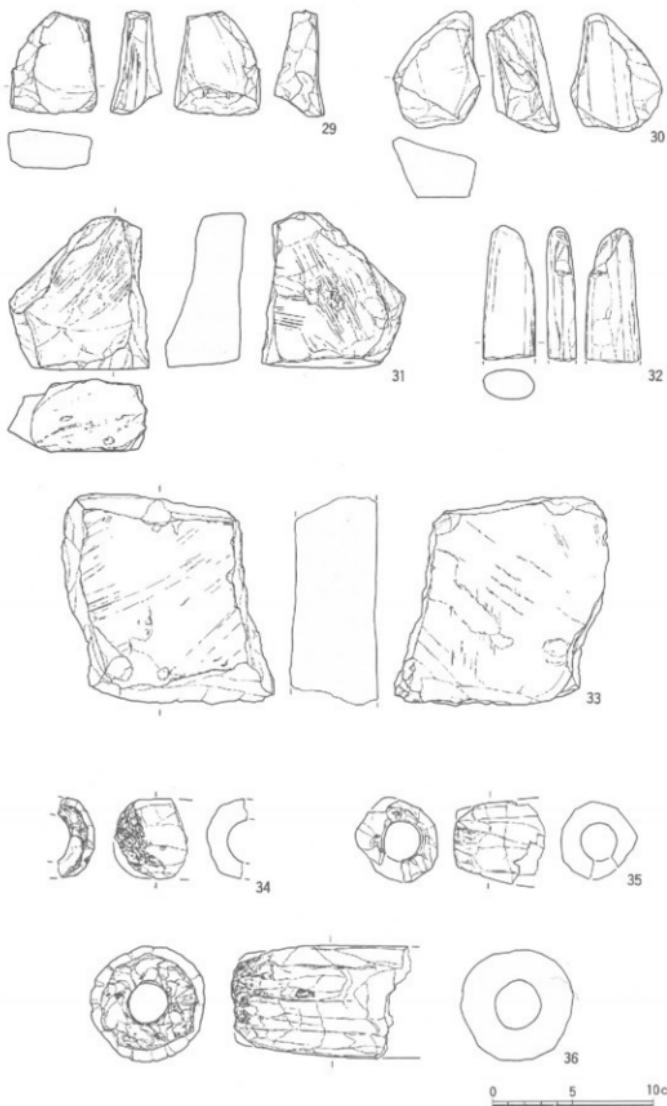


fig.22 石製品・鉄造・鍛冶関係遺物実測図 1:2

N 考 察

1. 条 坊

西隆寺は平城京右京一条二坊九・十・十五・十六坪の4町を占めていた。寺地を囲む条坊道路は東西南北の順に、西二坊坊間路、西二坊大路、一条条間路、一条北大路であった。また、西隆寺造営以前には寺地を4等分する形で、南北に西二坊坊間西小路、東西に一条条間北小路が通っていた。

これまでの西隆寺関係の報告書では、条坊遺構の考察に推定条坊計画線が用いられている。これは以下の仮定のもとに算出されたものである(『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺、1990、『報告書1993』)。

- 1) 条坊計画線の振れを南北方向は $N 0^\circ 19' 50'' W$ 、東西方向は $W 0^\circ 18' 58'' S$ とする。
- 2) 南北方向の計画線では朱雀門心($X = -145,994.50$ 、 $Y = -18,586.32$)を基準とし、東西南向の計画線では玉手門心($X = -145,753.54$ 、 $Y = -19,093.26$)を基準とする。
- 3) 1坊=1500人尺=1800尺、1尺=0.296mとする。

今回の調査で検出した条坊間連造構は、一条条間北小路、西二坊坊間西小路とそれらの両側溝である。これらと周辺の条坊間連造構との位置関係について以下に記す。なお、計算には上記の仮定条件を用いた。

まず、一条条間北小路についてである。第299次調査のSF692、SD690、SD691がそれぞれ一条条間北小路、南側溝、北側溝であると考えられる。第299次調査の東の第212次調査で検出した1坊の東西溝SD452・451はそれぞれSD690・691の延長線上にあり、一連であるとみなせる。第299次調査では北側溝の北肩は検出されていないが、両側溝の心々間距離は6.8~8.5mと推定され、条間小路の規模として妥当である。また、この道路の東の延長上には西隆寺第1次調査で検出した東門が位置する。門心は路心から計算上9cm北にずれるだけであり、東門は小路に合わせた位置に建てられたと考えられる。なお、東門心の座標は $X = -145,077.84$ 、 $Y = -19,399.07$ である(『報告書1993』)。路心(両側溝の心)の尖端値は、第299次調査区内で南北両側溝が並んで検出されている $Y = -19,519.00$ で $X = -145,078.59$ である。この点と東門心を結ぶ直線は一条条間北小路心と考えられるが、その直線式は次のようになる。

$$X = \tan 0^\circ 21' 30'' Y - 144956.525$$

造構と推定条坊計画線との位置関係は次の通りである。上記のように $Y = -19,519.00$ では、造構の実測値は $X = -145,078.59$ である。これは条坊推定計画線による計算値 $X = -145,089.88$ から11.29m(約38尺)北に位置する。この差は大きいが、現時点では周辺の条坊造構の検出件数が極めて少ないと原因が不明であり、今後の調査による解明が期待される。また、一条条間路の場合は『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成2年度』(奈良市、1991)によると、造構が推定計画線より13.4m(45.2尺)北である。この原因については、西隆寺に南面する一条条間路を西隆寺側に拡幅したためと考えておきたい、とされている(『報告書1993』)。

次に、西二坊坊間西小路についてである。今回の調査のSF105がこれにあたる。第299・306次調査のSD095が東側溝に、第306・309次調査のSD110が西側溝に相当する。西隆寺第3次調査(金堂地区)で検出したSF105に続く部分であり、西側溝は奈良市第207次調査で検出したSD03へつなが

る。なお、「報告書1993」では、西二坊坊間路は推定条坊計画線通りに施工されていたが、西二坊坊間西小路は推定条坊計画線よりも $5.22m$ （17~18尺）西に、西二坊大路は推定条坊計画線よりも $7.79m$ （26尺）西に施工されていたと報告されている。

以上のように今回の調査によって一条条間北小路が確認され、その位置が推定よりも北にあり、東門がこの小路に合わせて建てられていたことが明らかになった。また、過去の2つの調査で検出して
いた西二坊坊間西小路の延長部分が確認された。

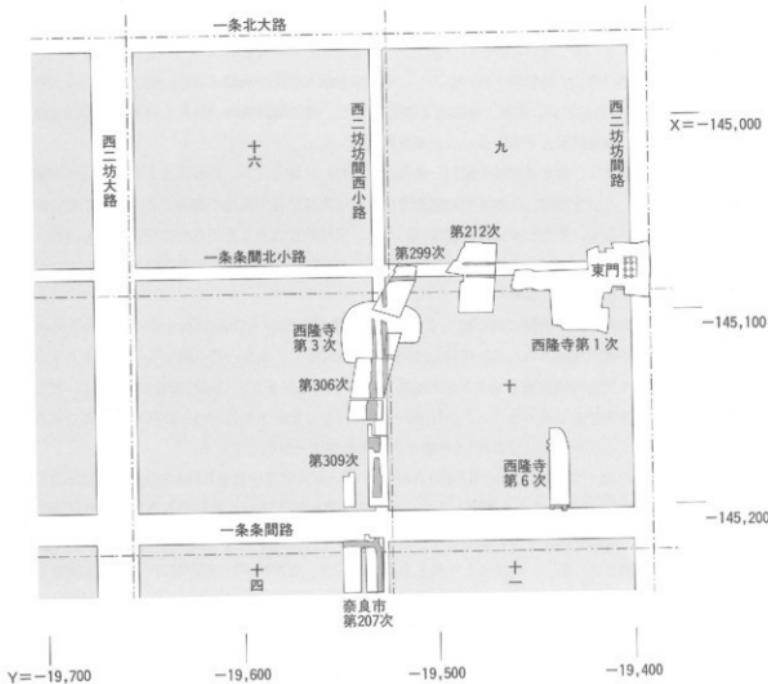


fig.23 条坊復原図(一点鎖線は推定条坊計画線) 1:2500

2. 西隆寺伽藍

今回の北面回廊・金堂地区（第299次）、金堂・中門北地区（第306次）、中門・南門地区（第309次）は西隆寺伽藍のほぼ中央を縦断し、西隆寺期では、北面回廊から南に金堂、中門、南門それぞれの遺構が見つかると期待された。しかし実際は後世の削平が激しく、わずかに北面回廊と灯籠遺構、瓦敷の痕跡しか検出できず、『報告書1993』の伽藍解釈を大きく変更するような段階にまでは至らなかつたのが現状である。以下では、わずかに得られた新知見から西隆寺伽藍に関する考察を試みたい。

（1）西隆寺造営以前の条坊区画との関係

まず、西隆寺伽藍を考える上で重要な関係にある西隆寺造営前の条坊区画について再考する。西隆寺伽藍の寺域が右京一條二坊の北西四町（九・十・十五・十六坪）を占めていたこと、四町を東西に二分する坪境小路（西二坊坊間西小路）があり、その中軸線が伽藍中軸線とほぼ一致することなどは知られていた（『報告書1976』）。実際、今回の3調査区でも、西二坊坊間西小路および東西両側溝を検出し、これまでの調査結果と矛盾しないことが判明した。

さて、四町を南北に二分する坪境小路（一条条間北小路）に関しては、以前からその存在自体が間題視されてきた。というのは、これまでの調査では、想定坪境位置で道路や側溝などの遺構が見つかなかったからである。そのため『報告書1993』では、史料的な点からその存在は指摘したもの、西二坊坊間西小路に比して何も言及していない。今回の北面回廊・金堂地区は想定位置を含んでいたが、その付近で何も検出できなかった。

一方、北面回廊の側溝の両側に筋を揃えて東西に走る溝SD690、SD691が見つかった。これらはそれぞれ調査区外東で検出されたSD452およびSD451に対応し、本来一連の溝であったと考えられる。これらの溝は想定坪境位置から北に約15m寄っているのであるが、『年報1999-Ⅲ』では、想定坪境位置に何も検出できなかったこと、SD690とSD452などを結ぶと約50mと非常に長い溝であることなどから、これらSD690、SD691を坪境小路の南北側溝と解釈している。

ここではそれに加えてSD690AとSD691の間にある一条条間北小路SF692の心が北面回廊SC450の心とほぼ一致するという点を強調したい。西隆寺伽藍配置を決める際にそれまでの条坊区画を利用したことは、南北中軸線で条坊道路心と伽藍心を同じくすることからも明らかである。東西を二分する南北中軸線だから等しいのは当たり前と考えられるが、東が440坪と西が410坪と規模が異なる点まで等しくするというのは、それらに相関関係を見出さざるをえない。したがって東西中軸線においても同様の相関関係があると考えても不自然ではなかろう。北面回廊心は想定坪境位置よりも北にずれているが、東門の心と合致し、西隆寺の東西中軸線であることは確実である。これにSF692の心も等しくなるということは、奈良時代初頭の条坊区画を決める段階で、すでに何らかの理由で坪境小路の位置が北にずれていたことを示すと考えられる。

ただしSD451、SD452の東延長部を東門付近では検出していない点が問題点として残る。これまで東門付近では西隆寺以前の遺構として南北溝SD005や東西溝SD007を検出している。だが、SD007は東門から西へ延びる寺内道路の南にある東西溝で、SD452の約6.5m南に位置する。一方SD007とほぼ直交するSD005の下層も西隆寺造営以前にさかのばると考えられている。これらから、SD452から鍵の手に折れてSD005下層、SD007につながると解釈することも可能だが、少々無理がある。

その他、西二坊垣周西小路の西側に開して、遺物の出土状況から工房施設の存在が暗示された。これにより、金堂・中門北地区で検出したSD751・SD752については、条坊区画との関係性は見出せなかつたが、同時期のSD110Bの改作にともない整備された区画施設に関係する遺構という可能性がでてきた。結局、今回の調査成果によって、いくつかの問題や可能性は残るもの、西壁等の変則的な伽藍配置が適當以前の条坊区画に規定されることはほぼ確実となった。

(2) 灯籠遺構と伽藍配置

前述の通り、西隆寺期の造拂で伽藍に関する新たな見解を導く材料は『報告書1993』と比較して、灯籠造構SX750、瓦敷SX760しか検出されなかった。そこで、以下では特に灯籠造構に焦点を当て、灯籠が伽藍との要素と密接に関係しているか、西隆寺伽藍の場合もふきえつを察したい。

これまで見つかった上な古代寺院の灯籠遺構例は以下である (tab. 4)。現在、灯籠本体が残存するのは当麻寺と東大寺大仏殿で、大半は灯籠基壇や基壇痕跡のみが検出された。およその時代順に並べたが、本稿では「加藍配協」および「金堂相模」と「加藍一金堂相距離」との関係の 2 点に注目した。

①灯籠と伽藍配置との関係

古代寺院の御帳配置は、飛鳥寺式から始まり、四天王寺式（山田寺式）・川原寺式・法隆寺式（法起寺式）・薬師寺式・大安寺式と変遷することが知られている（森郁夫『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局、1998）。加えて、奈良時代に登場する国分寺式は大安寺式に類似する形式である。詳細は省くが、中門の両妻から始まる回廊内で閉じられた空間内が左右対称となるのは、飛鳥寺・四天王寺式（山田寺式）・薬師寺式・大安寺式（国分寺式）および興福寺中金堂・東大寺大仏殿などで、灯籠痕跡が見つかったのはいずれもこの形式である。また、当麻寺の場合も回廊で囲まれてはいないが、中門・金堂・講堂の中心を通る中軸線上に灯籠が据えられている。一方、左右非対称なのは川原寺式・法隆寺式（法起寺式）などであり、これらからは創建時の灯籠痕跡は検出されていない。

すなわち古代寺院において灯籠が一基据えられるのは、国分寺式の西隆寺も含め、中軸線が認識できる左右対称の伽藍配置に限定される可能性が高いと推測できる。

tab.4 古代寺院における打籠造構例

	灯籠基盤 基礎付け穴	時期	造形の特徴・形状など	御殿における位置	全金属性別規格	金属性別種類 →灯籠	金属性別面取付 板・灯籠板	基本率
飛鳥寺	有	創建時 (324年頃)?	方4尺の台座存在 中央に徑16尺、深さ8寸の穴あり	中央堂・櫻を巡る中袖廊上、 中華堂と櫻の間	東西70尺(12.1m)×南北 80尺(11.7m)	5.7m (±1.95尺) (17.6尺)	5.3m (16.5尺)	0.203m (実測)
	有	?						
山間寺	有	後6世紀 8世紀頃に存在 する	高6寸、幅15cmの茎葉基部 八角筒状の茎葉各2枚 側面に斜めに切欠き、側面に15 cm、深さ10cmの穴あり	宝鏡院・中門、便路通る中 袖廊上、金堂との間	東西45尺(12.1m)×南北 50尺(15.2m)	7.2m (±1.8尺) (16.5尺)	9.6m (16.5尺)	0.333m (実測)
	有							
圓山 久米寺	無	創建時(7世紀前半)? 勝施は10世 紀	15.5mの方丈の玄地表下50 cmに螺旋状の波形が押り抜かれて いる。その他の波形も そのままの波形で残る	東室・藻を巡る中袖廊上、 東室と櫻の間	東西80尺(23.4m)×南北 100尺(27.4m)	7.2m (±2.46尺) (24.6尺) (±0.94尺)	6.65m (24.6尺)	0.2925m (実測)
	無							
夷奈寺 (生雲)	無	創建時(7世紀末? ~8世紀初頭)?	東西7.1m×南北2.0mの灯籠 基盤・基礎穴のみ	金堂裏睡上、東室裏	東西40尺(12.0m)×南北 30尺(10.8m)	5.1m (±1.70尺) (10.0尺)	3.9m (10.0尺)	0.200m? (実測)
	無							
猿谷寺 (平城)	無	創建時(奈良 時代前半)?	東西7.1m以上? 奈良北1.2m の柱頭装飾の跡(穴があり、 側面瓦が粗朶)。	金堂・中門を巡る中袖廊と東 西廊を繋ぐ中袖廊の交点	東西93尺(28.4m)×南北 81尺(24.3m)	19.5m (±5.99尺) (59.9尺)	17.5m (59.9尺)	0.298m (実測)
	有	?						
興福寺	有	創建時(7世 紀)? 7世紀代 に改築	後4.1mの岩岸苔葉六角形 側面・表裏・中央共に深30mm、 幅50mmの穴あり	中金堂・中門を巡る中袖廊 と東室・中門との間	東西35.05尺(10.6m)×南北 29.05尺(8.7m)	8.3m (±2.61尺) (17.9尺)	5.9m (17.9尺)	0.285m? (実測)
	有							
鹿苑 園分寺	無	創建時(7世紀中 葉)?	直徑2.6mの円筒形軸外 基盤・底盤。直徑40cm、 高40cm、底盤45cm。 15.0mの半圓柱穴あり	東室・中門を巡る牛軸廊と 東室・中門の間	東西123尺(37.9m)×南北 72尺(23.4m)	6m (±20.0尺) (15.5尺)	4.95m (15.5尺)	0.300m? (実測)
	有							
西園寺	無	創建時? (7世 紀)?	東西2.7m×南北2.3mの灯籠 基盤・基礎穴のみ	金堂・中門を巡る中袖廊から 東へ1尺、金堂と中門の間	東西129尺(38.7m)×南北 72尺(23.4m)	6.4m (±22.0尺) (22.0尺)	6.5m (22.0尺)	0.286m (実測)
	有							
東大寺 大仏殿	有	本尊は火災復 興(752年)?	本尊は火災復 興(752年)? 本尊は修復時代 以前の御動向	基壇に面接 大仏殿・中門を巡る中袖廊 と大仏殿裏	東西97.1m(327尺)×南北 81.3m(208尺)	24.6m (±8.2尺) (73.1尺)	21.7m (73.1尺)	0.289m? (実測)? 西(実測) 西(実測) (±0.98)
	有							
高盧寺	有	創建時? (白 鳳時代?)	丸柱・火袋柱 等、天井平 代(6世紀?) ではない?	金堂裏 講堂を結ぶ中袖廊 と金堂裏	東西16.4m×東西13.5m	9.4m (?)	7.3m (?)	?
	有							

②金堂基壇規模と灯籠・金堂間距離との関係

灯籠遺構は、いずれも金堂・中門を結ぶ軸線上で「金堂の前面」にある。また中門はないが、現存する当麻寺の場合も金堂・講堂を結ぶ軸線上で金堂の前面に灯籠が配される。つまり、灯籠と金堂に何らかの関係があると考え、前掲の表（tab. 4）からそれを模式化してみた（fig.24）。上段がおよそ奈良時代前の金堂で下段が奈良時代の金堂である。図中の「灯籠・金堂間距離」は金堂基壇縁から灯籠心までの距離を指し、括弧で記した数値は、長方形基壇の長辺を1とした場合の割合である。

まず、奈良時代を境に金堂が大型化する点、さらに上段と下段でそれぞれの金堂基壇規模および灯籠・金堂間距離が類似する点が指摘できる。前者は奈良時代以降、より金堂を重要視する傾向が強くなっていることを示している。実際、奈良時代前には回廊内に複数の金堂や塔が建てられていたのが、奈良時代ではこれらが回廊外に移されて別の区画をもつようになる場合が多い。西隆寺も奈良時代の他の金堂と同様の規模を持ち、金堂を囲む回廊の外に塔・講堂などを配置したと考えられる。

次に金堂規模と灯籠・金堂間距離の関係をみると、奈良時代前の場合は（東大寺・法隆寺は例外として）0.31～0.33とほぼ近似している。一方、奈良時代の場合は割合が小さくなり0.16～0.22となる。この割合の違いは金堂の大型化と灯籠・金堂間距離の延長の割合が異なることが原因である。つまり奈良時代以降、金堂は約1.5～2.0倍の規模となるのに対して、灯籠・金堂間距離は約1.2～1.3倍しか長くならない。ではなぜ同じ割合にしなかったかというと、灯籠の置かれた意味と関係しよう。灯籠はもともと「清淨な灯を神仏に獻する」献灯の意味から金堂正面に置かれたと考えられる（福地謙四郎『日本の石燈籠』理工学社、1978）。したがって金堂からあまり離れすぎていてもよくな。平城薬師寺や東大寺大仏殿の例もあるが、これらは金堂前面からの距離よりも位置を決定する別の要素が働いたためと想像する。ちなみに藤原京の本薬師寺では、平城薬師寺の位置で灯籠遺構は無かった。絶じて灯籠は、西隆寺を含め、配置や意味の上で金堂と密接な関係をもつことは明らかとなった。

さて最後に、西隆寺の灯籠遺構が中軸線から1～1.2尺東に位置する問題だが、他に同様のずれをもつ遺構が無かったために解決できなかった。西隆寺の場合、金堂の基壇規模が確定しており、前述した条坊区画との関係も把握できる。一方で、それが施工誤差と断定できるかというと、伽藍の西半分がほぼ宋発掘なことから、西面回廊の位置次第で伽藍自体に時期差がある可能性も残る。したがって、今後、これらの問題を再検討できる余地が多分に存在することを指摘して、今後の課題としたい。

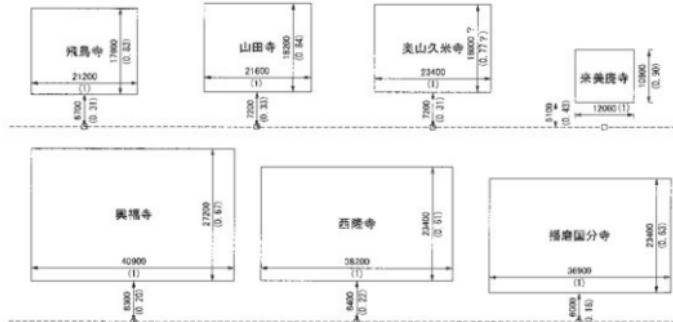


fig.24 灯籠・金堂位置関係模式図(単位:mm) 1:1000

3. 史料からみた西隆寺の成立と変遷

西隆寺の初見は、「続日本紀」神護景雲元(767)年8月内午条で、從四位上伊勢朝臣老人が造西隆寺長官になり、9月辛亥条には從五位下池原公禾守の次官任命が見え、同寺の造営開始を意味する(以下、断らない限り史料は「続日本紀」)。これとほぼ同時に西隆寺の西に西大寺も造営される。宝亀11(780)年「西大寺資財流記帳」によると、西大寺は天平宝字8(764)年9月11日に孝謙上皇が、金銅四王像の制作と寺院建造を誓願し、天平神護元(765)年に仏像を鋳造し、伽藍を開いたという。9月11日は、恵美押勝の乱勃発の日であり、かつ四天王は国家を鎮護する仏であるから、西大寺は、押勝の鎮圧を祈願するためのものであった。そして押勝討滅後、重祚した称徳天皇と僧道鏡によって西大寺の造営が進められ、天平神護2(766)年12月には、天皇の行幸を迎えている(癸巳条)。

西大寺と西隆寺の関係を語るのは「東大寺要録」卷1で、天平宝字8年9月11日条に、西大寺の造営に続き実忠和尚の西隆寺別院建立が見える。「西大寺の別院としての西隆寺」の意味であろう(船池春峰「南都仏教史の研究 下」法藏館、1982)。僧寺の西大寺と尼寺の西隆寺の一体性が窺える。但し実忠の開寺は、他の史料では確認できない。神護景雲2(768)年5月、押勝の越前国地200町と、その娘婿御厨の地100町が西隆寺に施入された(辛未条)。西隆寺と押勝の乱の関連を読みとれる。同年7月、伊勢老人は修理長官を兼務した(戊子条)。以後、造寺司の機能は次第に修理司に移行したとみられる。

1971年の発掘調査で西隆寺東門地区から出土した木簡は、造営過程の一端を示している(『報告1976』)。税の荷札の出土から、國家的造営であることが窺えるとともに、南家(藤原氏か)が用材を進上していること、近衛府や修理司の官人などが智識錢を出していること、舍人丁や斐太工らが属す工所という組織が造営に関与していることなどがわかる。また井戸の掘削や埋め戻しの役夫に糞を支給しており、造営以前の敷地内に井戸があったことを示している。西隆寺の敷地は、時代が下るが長承3(1134)年5月22日「大和国兩寺敷地図帳案」(竹内理三編「平安造文 古文書編」5-2302号、東京堂出版、1963)などにより、右京一条二坊九・十・十五・十六坪を占めていたことがわかる。

宝亀2年(771)8月、西隆寺に印が頒布されており(己卯条)、同寺は既に機能していた。また同年9月3月、皇子太山部親王の病氣平癒を願って東大寺・西大寺・西隆寺で誦経が行われており(丙寅条)、その格の高さが窺える。その後、西隆寺の具体的様相を語る史料はほとんど無くなる。わずかに「弘仁式」主税・「延喜式」主税上に、越後国の出舉本船として西隆寺料1万束のあることが見える。そして元慶4(880)年5月になると、西大寺に西隆寺を撰願させるという記事が出てくる(『日本三代実録』同月壬申条)。西隆寺の衰退を示すものである。六国史に現れる西隆寺は以上である。

鎌倉時代になると、建長3(1251)年「大和西大寺々領檢注帳」(竹内理三編「鎌倉遺文 古文書編」10-7398号、東京堂出版、1976)によれば、既に西隆寺の地は田畠になっていた。この時代の西大寺の絵図にはかつての西隆寺の寺域も描かれる。時代が下り、元禄11(1698)年「西大寺御藍絵図」に宝亀11(780)年12月29日絵図流記による伽藍の配図(PL.5)が、同年「西大寺古伽藍敷地并現存堂舎坊院図」には堂舎の礎石のみが残る姿が描かれている。いわば後者が現況図、前者が復元図である。発掘調査で確認された伽藍配置と前者には部分的に一致する点もあり、何らかの根拠に基づいて描かれたとみられる。しかし延宝9(1681)年間板の林宗甫『大和名所記』(和州旧跡考)では、西隆寺の跡さえ不明になっており、後者は現況図とは考えがたく、前者による想像図とみるべきであろう。

V 結語

本書でこれまで述べてきたことを要約し、残されたいいくつかの課題に触れ結語としたい。

まず、西隆寺伽藍をとりあげ、次いで西隆寺以前の平城京条坊、平城京以前の遺構の順に記述する。

西隆寺伽藍 西隆寺伽藍中枢部については1971年以来の発掘調査で金堂とそれを囲む回廊、北東に食堂、南東に離れて塔、寺域の東面の大路に聞く東門が検出されている。

今回の調査地では、金堂と北面回廊、そして、中門・南門推定地を調査し、伽藍中枢部に関して新たな見知り加えることができた。

まず、金堂に関しては、金堂前面の瓦敷と灯籠跡の検出があげられる。瓦敷はこれまでにも金堂の東面などで部分的に見つかっていたもので、今回の検出により、金堂の南全面および東側に広く瓦敷がめぐっていたことが知られた。灯籠に関しては、金堂との位置関係について、若干の問題を提起している。すなわち、灯籠の位置が従来推定してきた金堂中軸線よりも、天平尺で1~1.2尺東にずれる点である。他の古代寺院の遺構では、左右対称の伽藍配置をもつ寺院の場合、灯籠が伽藍中軸線と一致するのが通例であり、本例は稀な例外となるのが問題となる。また、灯籠の位置は、金堂とともに回廊の東西中軸線との関係でも注目されるが、回廊の東西規模が未確定であるので、施工誤差、施工の時期差などの問題も含めて、西面回廊の調査の進展を待って検討することにしたい。

北面回廊については、北東入隅から7間目の柱の予想位置に合致する礎石の据付け跡を確認した。北面回廊柱間が桁行10尺、梁間各8尺の規模でこの位置まで連続していることが確認された。これにより、講堂が北面回廊中央に取付く可能性は最終的に無くなうことになる。やはり、講堂は北面回廊の北方に位置するとみてよいであろう。

中門と南門については、後世の削平が著しく、遺構は残っておらず、推定地の近く検出された瓦あるいは、凝灰岩片などを廻棄した土坑の存在によっておよその位置を推定するにとどまった。

西隆寺伽藍に関しては、以上のような調査成果を加えた復元図を示した (fig.25)。基本的には『報告書1993』を踏襲しているが、今回の伽藍復原図では北面回廊がそのまま伸びる形とし、新たに金堂前に灯籠の位置を示した。

なお、中門、南門（南大門）については位置、規模とも従来の推定復原のままである。

出土遺物のうち、西隆寺に関わるものとしては、多量の屋瓦の他に、経軸頭金具、石製六角小塔が注目される。六角小塔は正倉院の三彩小塔と同形同大のものである。

なお、遺物の上で、西隆寺の廃絶時期を明確に示すものは無かつたことも付記しておこう。

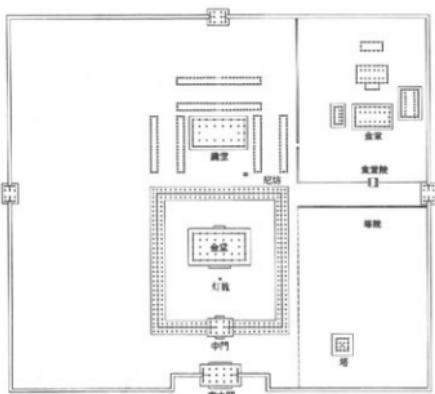


fig.25 西隆寺伽藍図 1:3000

西隆寺造営以前の平城京条坊 今回の調査地は西隆寺造営以前には、平城京右京一条二坊十・十五坪にあたる。条坊に関する新たな見を得た。

十坪の北西部で、北面回廊の下層に検出した東西道路は、一条条間北小路とみなした。問題は、その位置であり、従来の復元条坊に照らすと、かなり北寄りになる。この東延長上に過去の調査で検出されていた2条の東西溝ではさまれた空間については、坪内の道路と解釈されてきたが、今回はこれも条坊道路とみた。南の十四坪で検出されている東西道路が復元条坊よりもかなり北に寄っていることと考え合わせると、一条条間北小路およびその南の一条条間路は全体として北寄りに施工されることとなり、これが、この地における条坊施工の実態とみなさざるを得ない。ただし、周囲の条坊遺構の調査例が少ないため、他の条坊街区との距離、方位などの関係を整合的に解釈できるまでには至っていない。

上記の一条条間北小路の位置は西隆寺伽藍の設計計画に関わる点でも重要である。この道路と北面回廊は軸線を共通にしており、北面回廊の設計にあたってこの道路が基準にされたことが推定できる。さらに、西隆寺東門の位置も北面回廊の軸線の東延長上にあるので、同一の基準によったとみてよいであろう。西隆寺東門の位置が従来の復元条坊街区に対して大きく北にずれている理由についてはこれまで不明であったが、これで解決をみたことになる。

十坪に関しては、北を限る一条条間北小路の検出により、区画の規模は1町と確定した。今回調査した十坪北西部に関しては、塵芥処理用と思われる土坑の他には建物などの顯著な遺構は存在しないことも、区画の隅の様相としてふさわしい。十坪では、これまでの調査で、南寄りに大型の掘立杭建物の他、井戸数基と小規模な掘立柱建物が検出されている。『報告書1993』刊行以後の調査でも、十坪の西寄りに、井戸や塵芥処理用とみられる大きな土坑が検出されていることも付け加えておこう(第212-14次調査SK01、『概報1993』)。特にこの土坑では奈良時代半ばまでにおさまる多量の土器とともに、鉄釘、鏡、鐵鎌、砥石などを伴っていた。今回報告した西二坊坊間西小路東側溝出土の銀製帶先金具と共に十坪の性格を探る上で注目すべき遺物である。

これに対して、十五坪では井戸と南北方向の堀、少數の土坑を除けば、まとまりの不明な小穴が多数あるのが特徴であり、中心的な位置を占める建物の存在は明らかでない。一方、出土遺物の様相は注目をひく。坪内には炭化物を多量に含んだ土坑があり、坪の東を限る西二坊坊間西小路西側溝、特にその南寄り部分に顯著であるが、これらの遺構から轆羽口、砥石などの鋳造関係遺物が集中して出土している。西側溝の遺物は本来十五坪から廃棄された遺物と推定できるから、十五坪でも南寄り部分には、金鳳製品の製作にかかわる工房などが存在していたことを示唆している。

平城京以前の遺構 平城京以前の遺構としては、大型の掘立杭建物が検出されたことも特筆される。柱掘形に残された断面長方形の角柱は、藤原宮下層(SB3650、『飛鳥藤原宮発掘調査概報15』)に類例がある。西隆寺周辺の調査では、これまで、この建物と同様、北で西に大きく振れる方位をもつ掘立柱建物、窓穴住居、溝などの遺構が検出されている。今回の調査では、直接遺構とは関連しないが、弥生土器や古墳時代の土器(布留式の土師器、6世紀後半の須恵器)や埴輪(4世紀末前後)などが少量出土しており、それらのいずれかの時期に対応する可能性がある。

報告書抄録

ふりがな	さいりゅうじあとはくつちょうきほうこくしょ						
書名	西隆寺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	田辺征夫・千田剛道・館野和己・次山淳・蓮沼麻衣子・高橋克壽・中島義晴・神野恵・松浦五輪美・宮崎正裕						
編集機関	奈良国立文化財研究所						
所在地	〒630-8577 奈良市二条町二丁目9-1 Tel 0742-34-3931㈹						
発行者	奈良市教育委員会						
所在地	〒630-8580 奈良市二条大路南一丁目1-1 Tel 0742-34-1111㈹						
発行年月日	西暦 2001年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 °°'°"	東経 °°'°"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
西隆寺	奈良県奈良市 西大寺東町	29201	34度 41分 29秒	135度 47分 12秒	1999. 1.18 ~ 3. 5 1999. 7. 1 ~ 9.30 1999.10.20~12.28	1,376	都市計画道路 西大寺一条線
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西隆寺 平城京	寺院 都城	奈良時代 奈良時代	金堂 回廊 瓦敷 灯籠 柱穴列 井戸 側溝	瓦 土器 埴輪 石製品 金銅製品 銭貨	金堂正面の灯籠跡、 瓦敷を検出した。 伽藍中枢部の様相 をあきらかにした。 下層に平城京街区 の遺跡を確認した。		



北面回廊・金堂調査区(第299次)全景(北東から)



SC450・SB680・SD690(南東から)



SD095(北から)

PL.2



金堂・中門北調査区(第306次)(北から)



SX750(南西から)



金堂・中門北調査区(第306次)(南西から)



SE740(北西から)

PL.4



中門・南門調査区(第309次)東区(北東から)

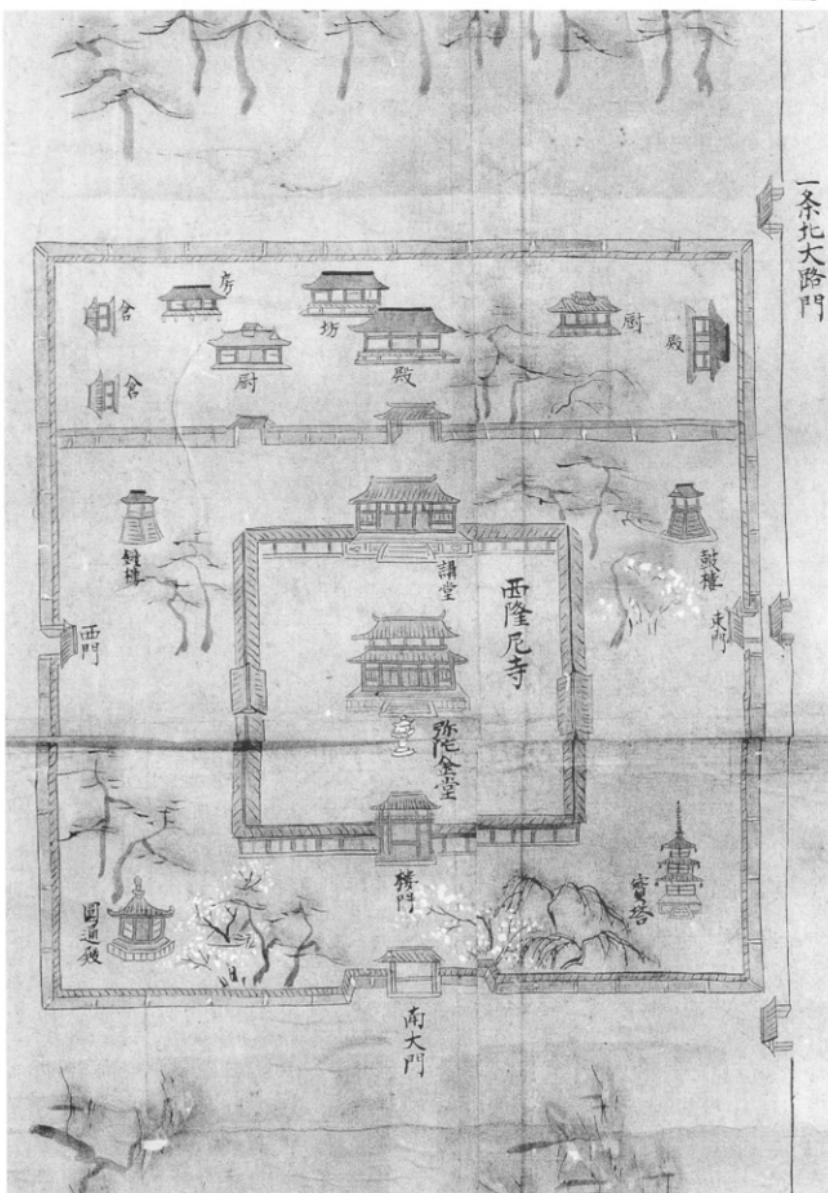


SX836(北東から)



第309次西区全景(北から)

一条北大路門



西大寺御藍絵図(西隆寺部分拡大)

PL.6



6235C



6761A



6237C



6775A



6225C



6663Cb



6012C



6668A



6668A



6284E.a



6710A

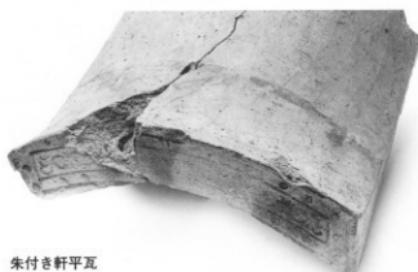
軒九瓦 · 軒平瓦



丸瓦



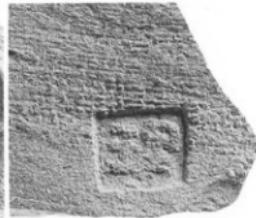
平瓦



朱付き軒平瓦



平瓦凸面



B

C



D



E



F

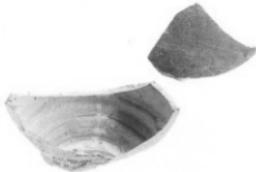
丸瓦・平瓦・朱付き軒平瓦・刻印瓦



27



65



62



27



I



63



土馬



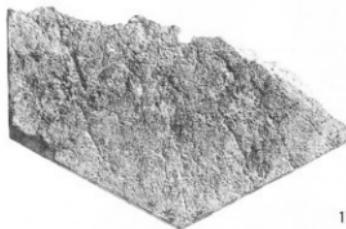
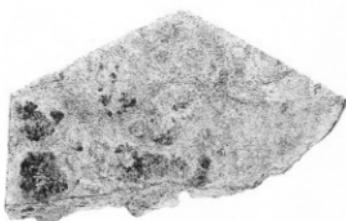
SD110



SD690



木製品、金属製品、錢貨、石器・石製品

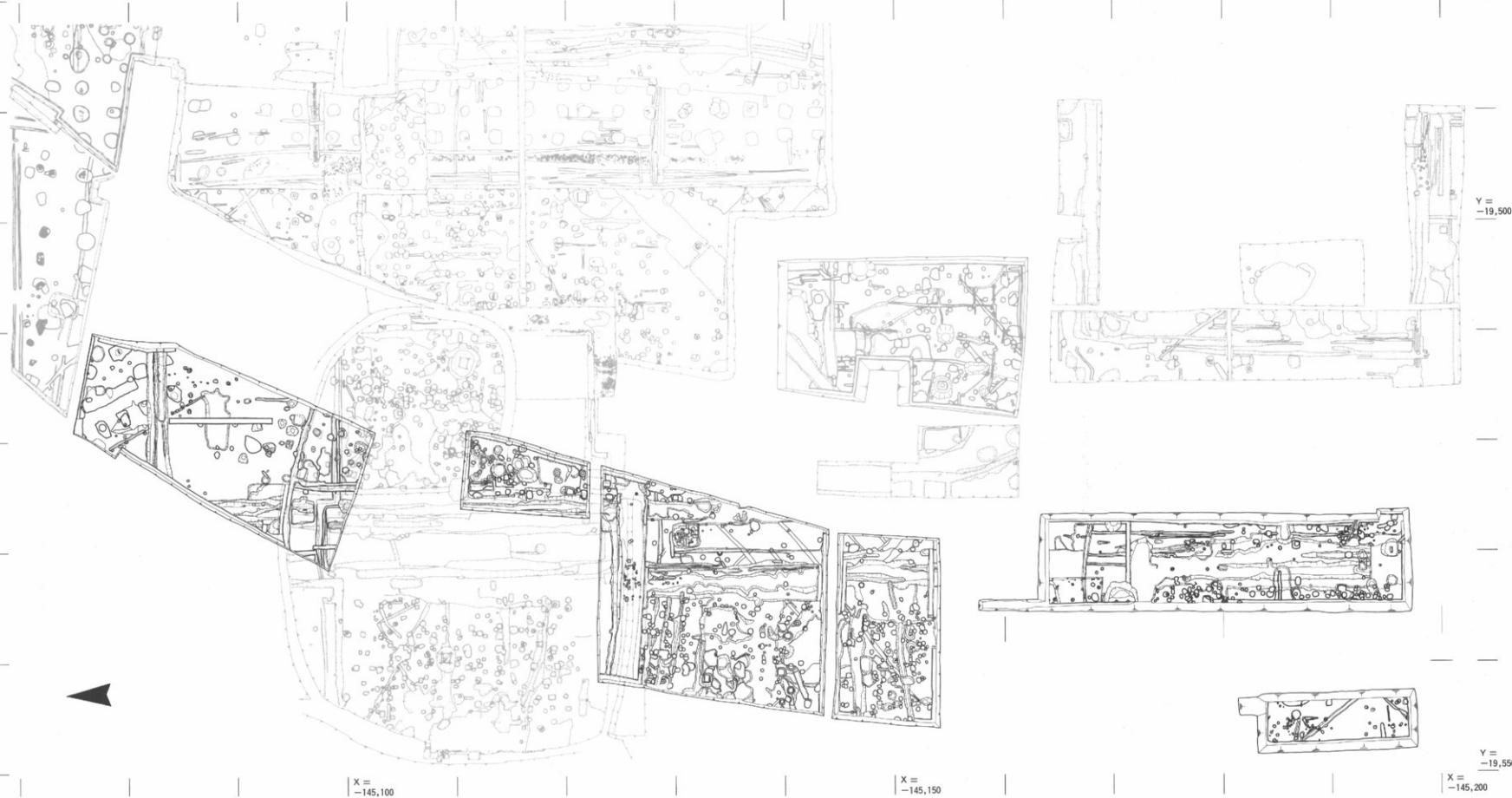


16

17



石製品、鑄造・鍛冶関係遺物



平城京右京一条二坊遺構図集成 1:300

西隆寺跡発掘調査報告書

2001年3月31日 印刷・発行

編集 奈良国立文化財研究所
奈良市二条町二丁目9-1

発行 奈良市教育委員会
奈良市二条大路南一丁目1-1

印刷 桃谷写真製版有限会社
大阪市天王寺区堂ヶ芝1-7-19
